
三国放浪記

ねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国放浪記

【Nコード】

N5695P

【作者名】

ねこ

【あらすじ】

目を覚ましたら森の中。そんな唐突に始まるお話。

第一話

——目を覚ましてみれば、そこは森の中だった。

「……………」

訳が分からぬ、と首を捻る少年が一人。

見たところ、三歳ばかりの幼い子供である。幼いが故に思考を放棄する。それは当然のことであり、しかしこの場においてそれは最悪の選択。

そこは森の中であり、獣が居るやもしれぬ奥深く。

か弱き子供が一人、獣に相対すれば死は免れず、なればこそ人が禽獣に勝る唯一の武器、知恵を駆使しなければいけないのだ。

それを放棄するなど自殺行為であると言わざるを得ないのだが、なんといても、当事者はまだ子供、それも仕方ないのだろう。

俯き目を閉じ不安に苛まれている子供の耳に、草を掻き分け近づく足音が聞こえた。それはどんどん近付き、子供に迫る。震え怯える子供に、しゃがれた声がかかる。

「——坊主、こんな所でどうした？」

人の声、そう認識した子供は顔を上げて声の主を見る。

第一印象は、仙人だった。

雪のように真っ白な髪と長い眉、白髯をなびかせて老人は子供を訝しげに見る。

面長な顔に整った顔立ち、上質な布を使ったであろう服に身を包み、涙に濡れた瞳で老人を見る。

明らかに高家の子弟、どう考えてもこんな森の奥深くに居るような身分の子供ではない。

見れば見る程、考えれば考える程おかしい。

何故、どうして、その思考は巡り、ただでさえ鋭い視線を更に厳しくして、子供を睨みつける。

老人の視線に晒された子供は、嗚咽を漏らしてますます小さく縮こまり震える。

それを見た老人は、己の顔つきを思い出し苦笑して幾分か声を柔らかにして子供に問いかける。

「坊主、連れは？」

「……………」

黙って首を振る子供に、老人は少しばかり困った顔をして考え込む。それを見た子供は、なにをされるかも分からない恐怖から逃げ腰になって後ろにじりじりと下がる。

老人はそれを目の端で捉え、顔に苦笑を浮かべた。

己の顔立ち、特に鋭い目つきについては己が一番よく理解している。若い頃は、やれ山賊だ盗賊だと騒がれたものだ。

暫し下らない思考と回想に浸り、現実を意識を引き戻す。

先程の位置より少しばかり離れた子供が、老人をビクビクと見ている。何故か先程より涙目なのは考えるまでも無く、老人のせいだろう。

どう宥めようか考え、それすらも面倒だと放棄し、子供に近寄り口を開く。

「なあ坊主、お前さん、行く所がないのか？」

「……………」

少し考え込むように目を伏せると、悲しげに一つ頷いた。

それを見て、やはりそうだったか、とこちらも一つ小さく頷き、続けて口を開く。

「——どうだ坊主、ワシの所に来ないか？」

「……………うん」

余りにもあつさりと、そして簡潔な問いに、子供も少し考えて頷き肯定の意を示す。

その言葉に満足げに笑い、鋭い顔を優しく綻ばせる。老人の顔を見て、子供もまた小さく笑った。

先程まで老人を怖がっていたであろう子供は、今は笑って老人を見つめる。これは、子供の年齢が幼いからこそ頷いたのであり、もう少し歳が上だったらこうはならなかっただろう。

幼き故に怖れを忘れ、悲しみを忘れ、ちっばけな好奇心と興味に惹かれて無謀な行動を起こす。

しかし、この場ではそれが最善の選択だったに違いない。老人に子供を殺す気など毛ほどもないのだから。

子供を背負い、老人は森の中を進み行く。

——向かうは己が住居、華山の頂きへ。

第一話（後書き）

初投稿。

目標を忘れずまったりと。

第二話（前書き）

飽きないうちに執筆執筆。

第二話

——時は後漢末、所は華山の頂き。

険しい山に切り立った崖、峻嶒にして莊嚴なる光景に目を奪われるであろうそこには、二人の男の姿があつた。

一人は黒髪黒目の若く澆漓とした青年である。青い着流しに身を包み、手には八尺余りの長大な棒——棍を持つている。

もう一人は老人、白髪白髯の仙人のような風貌をしている。黒い着流しとも漢服とも取れる服に身を包み、同じく長大な棍を持つ。

険しい山道をものともせず、駆け回り飛び回り、突き蹴り棍を振るい、相手を打ち倒そうと全力を尽くしている。が、全力を尽くしているのは青年のみ。老人は余裕綽々、片手で棍を振るいながら空いた手で尻を搔く、という青年を侮る仕草。

流石の青年も、いくら技量が離れていようと男子を侮るとは許し難し、と眦を決して気合一声老人に向けて跳ぶ。

その勢いは尋常ではなく、正しく電光石火、目に捉えられる速度ではない。その速度を落とさぬままに、老人に棍を突き出す。——

——が、それすらも老人には通用しない。

片手で先端の軌道を逸らし、体勢の崩れた青年に、手に持った棍を振り下ろす。手加減などない、渾身の一撃が、小気味良い音と共に青年の頭に直撃する。

「づあつ!?!」

「ははははは、惜しいのう。一撃必殺はよいが、相手が本当に隙を見せた時にやらねば反撃を食らうぞ。今のうちに、の」

青年が取り落とした棍を拾い上げ、両の手で弄びながら天を仰いで哄笑を響かせる。

それを目にしながら、痛む頭を手で押さえ、ふらふらしながらも立ち上がる。しかし、その目は未だ焦点を合わせておらず、立っているのもやっとなといった様子。見かねた老人が苦笑を顔に浮かべて棍を渡す。

それに縋って、やっと青年はまともに立った。

「情けないのう。たった一撃で崩れ落ちるとは……焦点も合っていないし、このまま昇天するのではないか？」

「爺さんの一撃がどんだけ重いつてんだ……あと全然上手くないから、そんな期待した目で俺を見るな」

「なんじゃ、この高等な言葉遊びを解さぬとは、つまらんのう……」

「それは言葉遊びとは言わないから安心しろ」

青年から放たれる冷たい言葉に、老人は背を丸めてしよぼくれる。そんな姿を見て、これがなんで最強の称号を得たのかと不思議に思う青年。技量と人格は関係ない、そう言ってしまうえば簡単だが、それでも納得できない青年であった。

納得できないなら理解しろ、理解できないなら捨て置け。その考え

の下に思考を放棄する。

頭を振って意識をしつかりと持ち直し、焦点の合わない目を老人をじっと見ることで荒治療的に治す。見つめられた老人は、ポツと頬を赤らめてちらちらと青年を見る。

気持ち悪い、それ以外の感想が思いつかない。残念ながら、王彩に衆道趣味はない。

ウゲツとえづいた青年は、先程の表情が嘘のように真面目な顔で明後日の方向を見ている老人に溜息を吐く。

真面目にしていれば、威厳溢れる姿に自ずと畏敬の念を覚えるものを。それが青年の気持ちであり、老人に関わった者全ての気持ちだ。また一つ溜息を吐く。顔を上げた青年は、その光景を見て驚愕する。

——老人が、急に胸を押さえて倒れた。

突然の事に、青年は慌てて駆け寄る。

老人の顔は青白く、血の気も引いて手足は冷たい。全身が痙攣し、一層震えたと思ったら大きな咳と共に、吐血。

老人を抱えていた青年の服を真っ赤に染め、尚更焦る。昨日まで、言ってしまうば先程まで元気に駆け回っていた人間が、突然倒れたのだ。

青年の頭に、一つの文字が浮かぶ。

『死』——不吉な、そう思い振り払う。

先ずは家に戻り、老人を寝かせることが先決。治療や対処はその後に考えればいい。

そう考え、青年は老人を抱きかかえて全力で駆けつけた。険しい山道を、切り立った崖を、己の最速で駆け抜ける。

岩を跳び、木々を蹴り、砂を巻き上げ家へと向かう。

茶を飲むほどの時間もかけず、青年は家へと飛び込んだ。

寝台に寝かせ、棚をひっくり返して薬を探す。しかし、病状も程度も知らぬのに、投薬など出来ない。針治療ならあるいは、とも思っただが青年にその技術はない。

どうすればいい、どうしたら助けられる。その思考ばかりが頭を巡り、肝心の方法は欠片も思いつかない。

時間ばかりが無情に過ぎていき、青年の焦りは深まる。

己の無力さを感じ、打ちひしがれ、絶望に身を染めていく。その繰り返しの中で、青年の耳に老人の弱々しい声が届いた。

慌てて寝台に駆けより、微かに目を開いている老人に声をかける。

「爺さん、爺さん！」

「……そう慌てずとも、死にはせん……」こふっ

「いいから喋んな！ 今、薬湯持ってくるから！」

部屋を飛び出ていこうとした青年の背中に、老人の声がかかる。それは弱々しく、今にも消えてしまいそうな程にか細かったが、それでも確かな威厳を持って響く。

青年も、慌てて踵を返し、寝台に駆け寄る。

「お前にな……言っておくことがある……」

「そんなの後でいいだろ！ 今は大人しく寝とけって！」

「まあ聞け……大切な話じゃ……」

静かに語り始める老人に、襟を正して大人しく青年は話を聞く。
語られるは江湖に最強の名を響かせ、朝廷や各地の群雄すらも震え
上がらせた一人の男の半生。それは夢のようで、泡沫の出来事であ
ったかのように儚いモノだった。

断片的に語られることはあっても、その全てを話すことはなかった
老人の半生が、今ここで語られている。その話に、武人の血が騒ぎ、
拳を強く握って体を震わす。

——話が終わった。老人の細く速い息が部屋に響く。

「まるでこの世は夢のよう……我が身の事も、夢のまた夢、か……」

「爺さん？」

「玉女峰の頂き……そこに、ワシと江湖を駆けた相棒がある……お
前に、それを授けよう……」

まるで遺言を残すかの如き雰囲気、青年は聞き返すことも忘れて、一言一句たりとも聞き逃すものか、と耳を傾ける。
それに優しく微笑み、言葉が続ける。

「……お前には、我が武の全てを授けた……精進を怠らず、最強を目指せ……」

「最強………」

「我が弟子、我が孫として、最強の名を大陸に轟かせよ……それが、ワシが言い残す最後の言葉じゃ……」

「……爺さん？ 爺さん、爺さん！」

言葉を終え口を開かぬ老人に、青年は慌てて声をかける。

しかし、ピクリとも動かず、その面に笑みを浮かべているのみ。手足は冷たくなつていき、脈を取れば、まったく動いていない。

しばし呆然と、魂が抜けたように虚空を見ていた青年。その目から、一筋の涙が流れた。

嗚咽を漏らし、抑えきれぬ涙が頬を濡らす。

「う、ああ、ああああああああああ……！」

——青年の悲痛な慟哭が、山へ響き渡った。

第二話（後書き）

シリ阿斯（笑）

第三話（前書き）

爺さん退場につき、次話辺りから一人称へ移行。
しかし名前を書くのに違和感たつぷり。

第三話

——太陽が中天に掛かる頃、華山の頂きに一人の男の姿があった。

男の目の前には、少しばかり盛り上がった土の山。

そこに立つは、華山の岩を削って立てた立派な墓石。

『華山仙人・王家亡祖父勝之墓、不肖の孫・王彩謹んでこれを立てる』

刻まれた文字は、そこに立つ男——王彩が剣で刻んだもの。

自らが刻んだ文字を見て、幼い頃よりの老人——王勝との思い出が胸に去来する。

かつて、森の中に捨てられていた自分を拾い助け、華山に連れて行った祖父。塞ぎ込んでいた自分に、武を授けてくれ、生き甲斐を与えてくれた。

時に厳しく、時に優しく、熱心に己の武の全てを授け、そして黄壤に去っていった。

思わず、目頭が熱くなるのを抑えられなくなる王彩。

もつと恩返ししておけばよかった、もつと何か出来ることはあったんじゃないか、何故早くに気付いてやれなかったのか、何故自分は無力なんだ。

ただただ己の無力さ、非力さを嘆く事しか出来ない。

しかし、嘆くばかりでは、祖父の遺言を叶えることも出来ない。

王勝の最後の言葉が、脳裏に蘇る。

——我が弟子、我が孫として、最強の名を大陸に轟かせよ

目を閉じ、祖父の笑顔を思い浮かべる。

いつも笑顔で、下らない話をしては一人で笑い、最強の武など欠片も感じさせなかった祖父。

空を見上げ、流れる雲を見る。流れては消え、また現れる雲。それはまるで、人の命のようだ。

ならば、ここで王勝が死んだのも運命で、この大陸のどこかでまた新しい命が生まれるのだろう。

首を振り溜息を吐く。

なにを哲学的な事を考えているのか、そう思い右手に持った棍を強く握る。

玉女峰の頂き、木々に隠れて洞窟があった。中は広く、まるで鍾乳洞のよう。

その最奥、最も広い場所に箱があり、そこに収められていたのは、鮮やかに光る八尺余りの長大な棍。

材質も分からず、しかし、剣を叩いてみれば叩き折る程の固さを誇る。

驚くべき業物であり、世にまたとない得物だろう。正しく最強の武人と共に江湖を駆けた伝説の武器だ。

銘は刻まれていないが、武器に名など不要でしかないのだから、わざわざ付ける必要もない。

淡泊にそう考えるが、やはり王勝の得物に勝手に名を付けるというのも可笑しな話だろう。

棍——無銘を一度大きく振るい、一つの誓いを立てる。

「我、王華山、大陸に最強の名を轟かせる日まで、墓前にまみえる事は無いと誓おう」

目を瞑り、声に出した事を心の中で反芻する。

何年かかるか分からないが、最強の称号、そう簡単に得られるものではないと理解している。

大陸にその名を轟かせた王勝に、一度たりとも勝ったことがないのであるから、自ずとその困難さは分かるだろう。

しかしそれでも、墓前に誓ったのだ、違える事など出来ない。

踵を返し、墓前より離れる。

振りかえる事はない。最強の名を手に入れた時、ここに戻ってくることになるのだから。

恐れもない、悲しみもない。ただあるのはまだ見ぬ武人への期待と己が武の成長の希望。

「見ててくれよ、俺は今に最強の名を響かせる！……その時まで、さよならだ、爺さん」

山を下り、いつも王勝が食料を買いに行っていた村へ立ち寄る。

王彩自身はあまり来た事はない村であるが、王勝は村長とも面識深く親交もあつた。並ぶ家々を見て、人家の造りはこうなっていたかと記憶が薄れていたことを嘆く。

たまに目に入る家族の姿、特に王勝と同年代程度の老人を見て、一瞬目頭を熱くするが、笑顔で生きるのだと決めた身として、祖父の死を引きずる訳にはいかないと、一つ首を振って思いを払う。

村長の家につき、祖父が死んだ事、今まで世話になった感謝、その他の事を告げる。

静かに聞いていた村長だったが、旅に出る旨を告げると、それならば、と立ち上がりついてくるよう王彩に言つた。

村長は家の裏の厩に入ると、一頭の馬を牽いてきた。

燃えるような赤い身体、鋭く強い光を湛えた眼は、王彩をじっと見つめている。汗すらも赤い、一日に千里を駆けると言われる汗血馬だ。

「ほう……村長殿、こいつは？」

「うむ、つい先日ワシの知り合いが届けてきてのう、誰にも乗りこなせない暴れ馬じゃが、天下に名高い華山仙人なら乗れるやもしれぬ、そう文に書いてあつたのじゃ」

「へえ……俺に乗れ、と？」

「鉄心殿の孫にして、唯一の弟子なら或いは、と思うての」

「ふむ……どれ、それなら乗せてもらつとするか」

村長の言葉に頷き、汗血馬へと近づく。

低く唸り、王彩を威嚇する。王彩と言えば、恐れげもなくちかづいていく。

「なあ、お前……怯えてんのか？」

人の言葉を解するかのように、汗血馬は一際大きく嘶く。

それを見て、小さく微笑む。かつて自分も、怯え暴れて過ごした時期があった。そう思い出し、一つ頷く。

そして、目にも止まらぬ速さで汗血馬の背に飛び乗る。驚いた汗血馬は、王彩を振り落とそうと跳びはね暴れる。

しかし、王彩はたてがみをしっかりと掴み、振り落とされまいとする。

茶を飲むほどの時間、暴れ回る汗血馬の背に乗り続けた王彩は、疲れて落ち着いてきたところで首に腕を回して思い切り締め上げる。苦しくなってきたか、少しずつ動きが小さくなり、ついには完全に止まった。

「ふう……お前は、これでお前の相棒だ。これからよろしくな」

乱暴な、いつそ横暴なまでの王彩の言葉に、汗血馬は大きく嘶いた。

——— 今この時より、王華山の旅は始まった。最強の名を大陸に響かせんと、その棍を振るう。物語はまだ始まったばかり。彼が華山に帰れるか、それも天のみぞ知ることである。

第三話（後書き）

話が進まない。二十話くらいで終わるだろうか。
あと真名思いつかない。

第四話（前書き）

一人称のテスト。

しよつかと思って止めた。違和感しかなかった

第四話

——朝焼けが大地を照らす頃、赤錆びた大地に行く一騎の馬がいた。

華山を発つてより早数日、一路南西へ向かう王彩と汗血馬である。何故南西に進路を取ったかと聞かれれば、一言で答える事が出来る。都があるから。ただそれだけ。

華山の南西、そこに都・洛陽はある。

数日前に立ち寄った村で、天子が暴政を行っているから民が苦しむのだと熱弁を振るう若者を遠目に見た王彩は、実際に己の目で確かめようと洛陽へ向かった。

洛陽へ向かう理由はそれだけではない。

そもそも、この大陸を統べる天子が政を行う地が、朝廷の置かれる都である。そして都とは、当然の如く最も繁栄している都市。

繁栄とは、即ち経済的発展が大きいという事。つまり商いが盛んに行われているのだ。

商人が多くいるならば、そこには行商人も数多く行く事になり、行商人が居るならば各地の情報も多く流れ込むのである。

王彩には大きな野望がある。それ即ち、最強の名を得る事。

しかし、最強の名を得ると簡単に言うが、それを天下に知らしめるにはどうすればいいのか。当然、己が最強であると如何に主張したところで、なんの名声も無ければ狂人の世迷言と受け取られるだけ。

では、どうするか。簡単な事だ。

——世に名を知られる武人を、全て打ち倒せばいい。

それが王彩の辿りついた結論であり、当然の思考の帰結だ。

短絡的だという人間も少なからず居るだろう。しかし、この方法以外に、己が武こそ最強と天下に知らしめる方策があるうか。

少なくとも、王彩に他の方法は思いつかなかった。それを、短絡的思考と決めつけ嘲る事など余人には出来ない。いや、あつてはならないのだ。

都に行き、大陸中の情報を出来る限り集める。無論のこと、集めるのは武人の情報である。

それが王彩が洛陽に向かうもう一つの理由。寧ろ、こちらこそ本命だろう。

はつきり言ってしまうえば、誰にも仕えず己の武を頼みに生きる江湖の人間として、如何に天子が暴虐でも、関係ないと言えば関係ないのだ。

大局を見た時、天子が暗愚で臣下が奸佞の徒であれば、確かに天下の民は苦しみ、生活すらままならぬ者も出てくるのだろう。

しかし、決して慈悲の人とは言えぬ王彩にとって、見知らぬ他人が苦しんでいたところで気にかける程の事では無いのだ。

なにより、思い出してほしい。王彩は、何故王勝に拾われたのか。そう、捨てられたからである。子は親が居なければ生れぬ。ならば、子が捨てられるとは、即ち親にその人生を放棄されたという事。

当時は幼く記憶すらも朧げであるが、それでも王彩は、ただ一点、『親に捨てられた』という事だけは覚えていた。

否、覚えているのではない。心に刻まれているのである。

それはまるで呪いのようで、終生付き纏い離れぬ病魔の如きもの。

しかし、王彩は強き者、その心は強靱であり、少しばかりの闇に侵される人間ではない。

いつの日か、自身で己の過去を振り払う事が出来るであろう。

荒涼の大地をゆるゆると進んでいた汗血馬が、前触れもなく大きく跳ねた。

手綱も握らず、その背に寝転がり棍を胸に抱いて王彩は、その衝撃で宙に放り出された。しかし、無様に地面に落ちる事はなく、身を捻り足から綺麗に着地する。何事かと思い、汗血馬の脚先を見る。その数寸先に矢が刺さっていた。

ふと、村で聞いた話を思い出す。

ここ最近、『黄巾党』なる賊が大陸各地で蜂起しているとの事。

前方から喚声が聞こえる。遠目に望めば、小さな村が見えた。

賊が暴れているのかと、溜息を吐いて汗血馬に飛び乗る。これもまた天下に名を広めるには効果的な方策。

棍を強く握り、汗血馬を走らせる。飛ぶように駆け、小さく見えていた村が一気に迫る。近づくほどに、前方から上がる喚声は大きくなっていく。

村娘であろう女を手を抱いて、下卑た笑い声を上げている男が一人、走ってきた。その頭には、黄色い布を巻いている。

あれが黄巾党かと、棍を一度宙で振る。

汗血馬の背に立ち、天に轟くかのような大喝を響かせた。

手に棍を持ち、その様は威風凜々たる神将のよう。喝に怯んだ賊を目に捉え、村に聞こえ渡るように声を上げる。

「我が名は王華山、貴様らを駆逐する者也！ 我が道を遮る者、全て滅す！！」

第四話（後書き）

今更に思う。この主人公と自分の文章とこれからの流れで、コメデイは有り得ない。

第五話（前書き）

今日も飽きずに執筆執筆。

ところで、この小説と呼ぶには未熟すぎる作品、読んでる人ってどれだけ居るんだろう。

第五話

天にも轟く王彩の名乗りは、村中に響き渡り賊の動きを止めた。それを好機と見て、宙で威圧するかのように棍を一度大きく振るい、王彩は汗血馬を走らせる。飛ぶように駆ける汗血馬は、一筋の赤き流星のよう。

近くに突っ立っていた村娘を抱いている賊の頭に、轟と唸り上げて棍が迫る。

それを間拔けな目で見ていた賊は、一撃のもとに頭蓋を砕かれ脳漿が飛び散り、がくがくと奇妙な動きを見せて横倒しに倒れた。

その腕に抱かれていた娘は、死体の無残に歪んだ頭蓋を見て、小さく悲鳴を漏らして失神した。

賊のいない所に逃げろ、そう告げようとした王彩は、気を失ったのならとそれを横目で見て汗血馬を走らせた。

村の中に飛び込む。そこかしこに死体が転がり、連なる家々には血が飛び散っていた。

首の無い死体、四肢がもがれている死体、腸の飛び出た死体。どれも無残な死に様で、それは同時に、愉しんで人を殺す賊を彷彿とさせた。

「な、なんだてめえ！　ぶっ殺してやろうか！？」

感情の無い目で村を眺めていた王彩は、聞こえた声の方へ目を向けた。

そこには、震える手で剣を持ち、こちらを見据える一人の小男。頭に黄巾を巻いていることから、一目で賊と知れた。赤くぬらぬらと光る棍を見て尚、王彩の前に出るとは勇氣ある者だが、しかしその目には隠しきれない恐怖が見えた。

それを一瞥すると、特に気にせず汗血馬を前へ向かわせる。

ひっと賊が小さく声を漏らしたが、氣にも留めず前方を見据える。遠目に見えたのは、村の男衆を追い回している賊たちと、一所に集められた女衆を囲む賊の姿。

一つ息を吐き、汗血馬を走らせた。

自分は見逃すのかと、小さく安堵の息を漏らした刹那、小男は死角より薙ぎ払われた棍で首を一撃、半回転した頭で、何故後方が見えるのかと不思議に思い、自らの死を自覚すること無く息絶えた。一人たりとも逃がさぬ、王彩の非情さが見えた行動であつた。

自分たちの方へ迫る蹄の音を聞き、男衆を追い回していた賊は、何事かと怪訝そうに顔を音の方へ向けた。

その目に飛び込んできたのは、血に濡れた棍を持ち、氷の如き表情で迫る、紅色の馬に乗った王彩の姿。

賊は仰天し、男衆を追い回すことも忘れて呆然と王彩を見る。

そんな姿を見て、王彩は棍を振るい手近にいた賊の一人を殺す。

仲間の一人が殺され、やっと我に返った賊たちは、怒りの声を上げて王彩へと迫る。無謀、そう言うしかない行動である。

槍を持った賊の一人が王彩に走り寄るが、棍で胸を一突き、内臓が破裂し肋骨が折れ、その先が心臓に刺さり一瞬で息絶えた。

横から剣を振るった男は、前に突きだされた棍を横に薙ぎ払われ、首が一回転、血管と骨が擦じ切れ砕け、痛みを感じる間も無く絶命

した。

一撃当てる事も叶わず死んだ仲間を見て、賊たちの動きがほんの僅かに止まる。

弱者を虐げるばかりであつたが故の、圧倒的強者への恐怖。それに抗えるような男は賊の中には居なかった。

そうと見た王彩は、馬上より飛び降り着地。前方へ突っ込み、一振りて賊を吹き飛ばす。

宙を舞う仲間を見て、恐怖で頭がおかしくなつたか、奇声を上げて数人が王彩へ武器を振り上げ走り寄つた。

それすらも、無情な一撃のもとにその命を屠る。王彩に慈悲の二文字は無く、容赦など微塵も有り得なかつた。

抵抗することすら出来ず、息絶えていく仲間たちを見て、残つた賊たちは恐慌をきたし悲鳴を上げて逃げ出した。

冷たい目で逃げ惑う賊を見ていた王彩は、口笛で汗血馬を呼び、その背に乗って賊を追撃した。

「どこへ逃げる？ 命を奪つたのなら、等価値の物で償え。例えば、そう……貴様らの命とかな」

後ろから聞こえた声に、賊たちの恐怖は増大し、ますます逃げ足を速めた。

自分たちを逃がす事は無いと理解していても、一秒なりとも命を繋ぐ事ができたなら、もしかしたら奇跡が起きて助かるのではないか？

その微かな願いを胸に、賊たちはただ一心に逃げる。

——しかし、それも結局は夢い夢。

汗血馬の俊足からいつまでも逃げていられる訳も無く、一瞬で王彩は賊に迫った。

棍が鮮やかに振るわれ、賊たちはその命を散らした。

最期の一瞬まで、生きたいと願っていたが、その願いは叶う事は無かった。

平生人から略取し生活の糧としていたのだから、これもまた当然の如くに運命は決まっていた。

因果応報、応報覲面、結局は己の行動の報いが来たに過ぎないのである。その鉄槌を振り下ろしたのが、王彩というだけだった。

無表情に棍を宙で振るい、賊たちの服で血を拭い汗血馬を先の場所へ取って返す。

一所に固まって賊に囲まれていた女衆は、その位置から少しも動かずそこかしこに転がる死体を見て震えている。

助かった喜びより、普段見る事のない死体への恐怖の方が勝ったようだ。

なんとか助かっていた男たちは、妻であろう女を背に庇っているが、それでも震えている。

人を宥めるのは得意じゃない、そう心に呟いて、王彩は馬上から下りた。

並の馬よりも巨大な体躯の汗血馬の上からでは、怯えさせる事になるだろうとの、彼にしては珍しい人に対する配慮である。

女衆に近づいていくと、先程の戦闘——そう呼ぶにも値せぬ一方的な虐殺であるが——を見ていたのだらう、目に恐れを湛えて王彩を見る。

面倒な事だと溜息を吐き、びくびく怯える村人たちに声をかける。

「もう賊はいない筈だ。各々、家族の亡骸を探して埋葬するといい。俺も手伝おう」

「あ……ありがとうございます」

「礼は要らない。埋葬は死者への礼儀と生者の義務だ」

人への気遣いは知らぬ王彩であるが、死者への礼儀は弁えている。それは何故か、そう問われれば、やはり王勝の教えだろう。彼こそ、王彩の知識源の大半であるのだから。

家族の亡骸を見つけた村人たちは、その惨状を見て泣き崩れる。

それを気にする事も無く、王彩は汗血馬の体を、賊が着ていた服の血が付いてない部分でしっかりと拭う。

血の如き赤い汗を流し、その体には血が飛び散っている赤い馬。血が付いていようとまいと、特に視覚的に変わる事も無い。

友好を深めるといった目的での事、そう考えれば意味は有るのかも知れない。しかし、賊の着ていた服で拭くのは変ではないだろうか。だが、王彩が気にしていなければ、特に言すべき事でも無いであろう。

村人たちの亡くなった家族を埋葬し、王彩は出立の意を告げた。

助けていただいたお礼に、その言葉と共に数日分の食料が渡される。己が食うにも困るこの時代、食料を分けるなど自殺行為に等しい。本来であれば、だが。

この村は、賊に襲われ幾人も亡くなった。その分、食料を分けても

少なくなつた人数でなら生活していけるのだらう。

村の被害を考えれば少しは遠慮するのであるが、王彩は素直に受け取った。

彼自身は村人を助けたと思つてゐる訳でもないで、己の武を知らしめる為の一つの手段、そう考へての行動であるが故に、気兼ねすることなく受け取れるのだ。

村を出て、汗血馬を走らせる。向かうは南西、都・洛陽である。

後ろを振り返ると、遙か遠方に砂塵を巻き上げ村に向かつてゐる軍隊らしき影が見えた。

驚異的な視力で、旗印を見る。『華』の文字が書かれていた。

（『華』……聞いた事も無いな。まあ名の有る武人なら、都で聞くことになるだらう）

そう考え、あつさりと前を向く。

彼にとつて、無駄な行動は忌むべきものなのだ。寄り道をすれば、それだけ最強への道が遠くなる。

ただただ真つ直ぐに、最強を目指す。それだけが王彩の信念なのだから。

第五話（後書き）

恋姫武將、いつになったら出るんだろう。
もういっそ、反董卓連合まで出ないとか、ね。

後（ ）初めて使った。使う機会って以外に少ないね。

第六話（前書き）

更新遅滞、申し訳ありません。
間が空くとクオリティが下がるという罫。

第六話

太陽が南中する午の正刻、大地を駆けの一騎の赤き馬。乗り手は鮮やかに光る棍を弄び、手綱も握らず馬上に寝転がる。

今日も今日とて温かな日和、王彩はいつも通りに前を見る事すらせず、汗血馬に行く先を任せてうつらうつらと眠気と戦う。

しかし、今日ばかりはいつまでもそうしている訳にはいかなかった。

汗血馬が一つ嘶く。

それに王彩は身を起こし、前方を見る。

その目には、微かに望める城壁、都・洛陽の姿が映っていた。

「あれが洛陽か……うん、意外に早く着くものだ。ほれ、さっさと行こう」

王彩の声に、汗血馬は鳴き声を一つ。止めていた足を動かし、その歩を進める。

じつと洛陽の城壁を見つめていた王彩だが、また馬上に横になり目を瞑る。着くまでは起きない、そう心に呟く、睡魔に負けた情弱者であつた。

春の陽気にあてられ眠る王彩を乗せて、汗血馬はゆっくりと洛陽へ向かう。

その歩は緩く、少しも急ぐこと無く進んでいく。後ろから忙しない足音が聞こえ、馬車は何台も駆けて行った。大人数での移動であるから商人だろう。

たった一騎の馬に目を止める事もせず、早足で王彩を追い抜き洛陽へ向かう。時は金なり、そう言ったところであるだろうか。

ゆるゆると歩を進めていた汗血馬は、やっと洛陽の城門へ着く。一つ唸り、王彩を起こした。馬上で目を開け、のっそりと身を起こす。大きく伸びをし、欠伸を一つ。目を擦って背より下りた。

棍を所在なさに揺らしながら、汗血馬を牽いて洛陽の街へ入る。一步、城門をくぐり、圧倒された。

——目に映るは人、人、人。

華山育ちの王彩にとって、ここまで多くの人がいる光景は初めて見るもの。

黒山のひとだかりに、ただ圧倒される事しかできなかった。

人の多さに目を白黒させていた王彩は、周りの人からは田舎から出てきた若者のように見え、ある人は笑い、ある人は微笑ましそうに見つめた。

その視線を感じ、王彩は顔を微かに赤くして足早に城門の付近を離れた。汗血馬を牽いているので、人々は慌てて道を開ける。

並の馬より遥かに巨大な体躯を誇り、血のように真っ赤な身体は、群衆の中で一目でそれと分かる程に目立っていた。

集められる視線の意味を理解しているかの如く、汗血馬は一つ小さく嘶く。その声は誇らしげで、堂々たる響きをはらんでいた。

そそくさと城門より離れた王彩は、近くの食事処へ入った。

暖簾をくぐり、店の中へ入ると、大勢の人間の騒ぐ声が聞こえた。一瞬驚いた王彩だが、やはり都は違う、そう考え歩を進める。

勘定台の向こうに店主らしき男を見つけた。禿げあがった頭にでっぷりとした体、にこにここと笑顔を絶やさず愛想のよさが窺える。武人の情報が聞けないものかと、王彩は店主に声をかける。

「店主、一つ聞きたいんだが」

「お、どうした兄ちゃん。困りごとか？」

「困りごとと言う程でも無いが、今この天下で最も強い武人は誰か教えてくれないか？」

そう王彩が店主に言うと、少し思案するような顔になって顎に手を当てる。

それを見て、王彩は考える。

少しなりとも思案するなら、それは誰もが認める最強の武人はいないという事。

しかし考える程度には、天下には有名な武人がいる訳だ。

店主は王彩に顔を向け、口を開く。

「生憎と、俺は知らねえなあ。しかし、あの席にいる奴らは大陸中の噂に詳しいから、あいつらに聞けば分かると思うぜ」

「そうか、すまない」

「こつちこそ悪いな、答えらんなくて」

店主が指さした席を見ると、髭面の厳つい人相をした、いかにも武を嗜んでるといった男が三人、酒を飲んで談笑していた。礼を述べ、そちらへ足を向ける。

ふと、店の外から汗血馬の嘶きと男の悲鳴が聞こえた。

何事かと目を向ければ、どうやら汗血馬を稀代の名馬と見た男が、王彩がいない隙に盗んでしまおうと考えたのか、汗血馬に後ろ足で一蹴り、道の端から端まで吹き飛ばされていた。

呆れて溜息を吐くが、問題ないだろうと放置してまた歩を進める。

男たちの席へ近づくと、不審そうな目を王彩に向ける。

それもまた当然だろう。傍から見た時の王彩は、明らかに危険人物であるからして。

そんな視線も気にせず、王彩はにこやかに席の側に立つ。

作り笑顔は王彩の得意分野。侮るなかれ、あの江湖を渡り歩いた王勝すらも脱帽した王彩の作り笑顔は、人が見れば、まるで心から笑っているかの如き絶技。

余りにも無駄な技術ではあるが、重宝する事には変わりはないだろう。

「楽しんでいるところ申し訳ない。一つ、お尋ねしたい事があるのだが」

王彩がその声をかけ、店主に聞いた事をまた繰り返す。

この天下で最も強い武人は誰であるか、と。

その言葉を聞き、我が意を得たりとばかりに男たちはこぞって口を開く。

外見から予想される通り、武を嗜んでいた男たちは、やはり武にも詳しく、天下に名を知られた武人など数多知っている。それこそ、先の皇帝、桓帝や質帝の時代の武人すらも把握している。

かつて王勝が名を轟かしていた時代の武人すらも熟知しているのだから、その博識ぶりは自ずと知れよう。

さて、ここで王彩は天下の武人を知る事になる。

それは同時に、己の実力不足すらも理解させる結果になってしまふのだが、それはまだ先の事であるので、あえてここでは語るまい。

男たちの話で、王彩はこれからの進路を決める。

天下第一の武人、その言葉と共に真つ先に挙げられた人物——
呂奉先の下へ。

第六話（後書き）

一人称、やっぱり導入したいなあ。
あとお知らせ程度に、ジャンルを歴史に変えました。

第七話（前書き）

今日も飽かずに執筆執筆。

第七話

—— 呂奉先、晋陽にて黄巾党三万を壊滅せしめん。

まるで物語に出てくるような、英雄の功績である。

たった一人、援軍も無しで賊を蹴散らし、正しく一騎当千と呼ぶに相応しい。最強の称号、彼女以外に掲げられるだろうか。

しかし、三万を一騎で壊滅させた、などと聞いても、簡単に信じられるものではない。

そもそも、人の功績や戦の結果、それに類するものは誇張され、噂となれば更に真実からかけ離れるのが世の常である。

現代に伝わる中国古代の戦果で、正確な兵力が記述されている史書などまず無い。どちらが兵力で勝っていたか、それだけを知る事しか出来ないのだ。

だが、ここでは極最近の話であるから、そこまでの誇張は無いだろう。

言ってしまうえば、史書などと言う物は、勝者の正義を後世に伝える為に書かれるもので、それを書くのは当然勝者側だ。そこに敗者の正義など記述されず、己こそが絶対の正義である、そう主張するのみ。

つまり、呂布は王朝を開くような人間に仕えてる訳でも無し、その戦果が異常に多く伝わる事はそうそう無いのだ。

王彩とて、王勝から無駄ではあるが役に立つ知識をいろいろと教え込まれている。

その話の中で王勝が教えた事は、正義とは何たるや、歴史の陰に埋

もれた敗者の末路等、何故知っているのかと思わせる程に博識である。

まるで未来に生きているのかと、奇妙な知識ばかりを王彩に教えていた王勝。今となつては、彼がどんな人物であつたかを知る術は無い。

店を出て、神妙な顔で汗血馬を繋いでいた場所へ行く。

そこには、足で地面を搔いて威嚇するかのような声で唸っている愛馬と、道の端で目を回して倒れている男たちの姿。

溜息を吐いて、汗血馬を撫でて手綱を牽いて歩き出す。

「お前なあ、あんまり人を傷つけたらいけないぞ？ 面倒な事になるからな」

低く唸り、返事を返す汗血馬に、満足したように一つ頷き、また歩き出す。

棍を片手で無造作に下げながら、いつもと変わらぬその表情。しかし、見る者が見れば分かる、体から溢れ出る気迫。目には強い光が宿り、賑々しい通りでは、余りにも場違いである。

それも仕方のない事ではあるのかもしれない。

最強を志し、夢叶うその時まで決して墓前にはまみえないと誓つてまだ一年と経たず、もう最強の称号を得ている者を見つけたのだ。興奮に胸が高鳴り、気分は高揚して棍を握る手に自然と力が入る。しかし、すぐに力を抜いて落ち着く。

歩きながらも、その目は前方を捉えておらず、来たる手合わせのみに心は向かっていた。

前を見ていないなら人にぶつかるとは思わないかと思うが、そこは王勝より武を叩きこまれている故、風の流れて自然と体が動いて避けているのである。

歩くこと暫し、幾つ目かの角を曲がったところで、それが目に入った。

豪壮にして荘厳、来る者を圧倒するその威容は、しかし今の王彩には何一つ感じさせない物でしかなかった。

ここに最強の武人がいる、王彩の頭にあるのは唯それだけで、今の場に天子がいたとて邪魔な人間程度にしか思わないだろう。

門をくぐろうとするも、そこに控えていた衛兵に止められる。

それも当然で、ここは都であり城には名だたる王朝の官僚が居る。

そして何より、大陸を統べる天子が居るのだ。

自ずとその警備は厳重になり、棍を持って巨大な赤き馬を牽く王彩は、それこそ不審者であり、刺客かと思われても仕方のないことである。

それに王彩は、顔を歪めて忌々しそうな表情を浮かべる。

常であればにこやかな笑顔を作り、決して面倒事は起こさないように礼儀正しくしているのであるが、この時ばかりは違った。

その胸にあるのは最強の文字。道を遮る者は、例え天子であろうと全て蹴散らして進むと覚悟している。

ここで、言ってしまうばただか衛兵に道を遮られるなど不快以外のなにものでもなく、その面に感情が浮かんでしまうのも仕方が無かった。

しかし、それを見た衛兵は、すわ刺客かと槍を構えて、穂先を王彩に向け目を怒らせて睨みつける。

王彩は感情の無い目で穂先を見て、衛兵の顔に目を移す。光の無い、顔を見てるようで見ていない、まるで死人のような瞳。

その眼でじつと見られた衛兵は、全身の毛が逆立ち、恐怖から体が大きく震えた。

得体の知れない恐怖に襲われ、仲間を呼ぼうと口を開いた。

――刹那、微動だにしなかった王彩が突然動き、手に持った棍を真っ直ぐ一突き。

衛兵の壇中に棍が突き刺さり、肋骨がへし折れ心臓すらも破裂、言葉を漏らす間もなく、驚愕の表情を顔に張り付かせたまま絶命した。

吹き飛んだ衛兵を見て、何も感じる事は無いのか、表情も変えずに汗血馬を牽いて門をくぐる。

それを目撃していた人間は、幸か不幸か一人もおらず、しかし衛兵の死体は放置しているので、すぐにばれる事となろう。

だが、王彩にとって、その程度は気にするほどの事でも無く、今はただ最強の武人、呂奉先と戦う事のみが頭にあった。

練武場はどこかと首を巡らし、目的の場所をその目に認めた。

表情の無い顔にそぐわない綱々とした目、血が沸き返り、胸は興奮と高揚で高鳴る。迷わず、その歩を進めた。

そこに、己が渴望する『最強』がいるのだと信じて。

静かに、しかし隠しきれない気迫を伴って、王彩は練武場に踏み込んだ。

そこには、幾人かの兵士と、間違いなく達人だと王彩に思わせる一人の少女がいた。

薔薇色の髪で、それほど身長は高くない。

手には八尺余りの方天戟を握り、雰囲気は小動物のような優しさと癒しを醸し出している。

練武場にいた幾人かの兵士と対峙している事から、調練の途中であろうか。対峙する兵士たちは満身創痍、今にも倒れそうな程に傷つき足も震えている。

「もう一度、お願いします!!」

「……わかった」

どこに立ち向かうだけの体力があるのか、それでも兵士は声を上げて続行を願った。

その声に少女は頷き、方天戟を左半身に流し、一気に間合いを詰めて兵士たちへ迫る。それを見て、兵士たちは槍を構え、なんとか一矢報いようと突きだした。

しかし、それすらも少女には届かず、振るわれた方天戟が槍を弾き飛ばし、それを握っていた兵士諸共吹き飛ばした。

呻き声を上げて、今度こそ起き上がれない兵士たち。少女は方天戟を一度振るい、練武場を出て行こうと王彩の方へ向かった。

王彩を見て、足が止まる。誰かと尋ねるが、その返事も返さない。

王彩は、返事も返せない程に胸を高ぶらせていた。

雷の如き一撃を見て、確信した。彼女こそ『最強』、呂奉先である。自然と目には輝かしい光が満ち、棍を握る手には力が入る。

何度目かの質問で、王彩の意識は現実に戻った。

やつのことで、呂布の声に耳を傾ける。曰く、貴方は誰か、と。よく聞いてくれたとばかりに、顔に笑みを浮かべる王彩。昂奮の余りの、普段は見せない心からの笑顔である。

「これは失礼しました。私は王華山、旅の身空の武芸者でございます」

「……恋は呂奉先。なんでここにいるの？」

その言葉を待っていたと、笑みが深まった。

まるで陶醉しているかのように頬を紅潮させ、口を開く。

「それはですね——最強と名高い貴女と、一手お手合わせ願おうと思ひまして」

「……恋と？」

「ええ。無論、嫌なら嫌と言ってくださいれば、今日のところは引き下がります。如何でしょうか？」

少し思案する呂布。

もし目の前に立つ男が強ければ、手合わせも時間を食うだろう。しかし、弱ければすぐに終わる。いや、己より強い人間などいない。この世の全ての武人は、全て己より下。

なら、手間取る事などありはせず、迷う必要もないことである。

簡単に思考を終え、王彩を見る。

にこにこと笑顔を浮かべ、如何にも優しげな好青年といった風だ。だが、呂布には見えていた。王彩の、その笑顔の仮面で隠された、狂気を。

「……わかった。やる」

「おお！ 承諾してくださいますか、ありがたい！」

「……ここで、やる？」

「無論です」

互いに無言になり、練武場の中央に、間合いを取って立った。

それぞれ得物を構える。王彩は棍を中段に、呂布は方天戟を無造作に下げる。

練武場に、緊迫した空気が張り詰め、二人の体からは気迫が目で捉えられるかのように立ち昇る。

そして、二人は同時に動いた。王彩が、雷鳴のような名乗りを上げる。

「——王華山、参ります！！」

「――呂奉先……いく」

第七話（後書き）

常時、感想や意見、批評、批判など受け付けております。
文中で述べていることは、真実とは限りません。話半分で流してい
ただければ幸いです。

第八話（前書き）

前話の誤字脱字、文の乱れの多さ、誠に申し訳ありません。全ては推敲を忘れた私の不徳の致すところでございます。不快にさせてしまったなら、心苦しいばかりです。

これからも、拙作を読んでいただければ幸いに存じます。

第八話

——先手を仕掛けるのは、王彩。

間合いを詰め、中段に構えた棍を振りかぶり、方天戟を無造作に下げる呂布に向けて、気合一声振り下ろす。

しかし、それは頭上に掲げられた方天戟によって防がれた。長大な方天戟は、それに見合っただけの重量を誇る。だが、それすらも呂布は、まるで自分の腕を振るかのように素早く、かつ自在に操る。それこそ呂布の強味である、世に卓絶した剛力。

振り下ろした勢いを駆って押し込むが、微動だにしない方天戟に、さしもの王彩も微かに顔色を変え、その場より飛びすさる。

地に足を着けると同時に、跳び出して呂布に迫る。棍を突きだし、腹部を狙う。それすらも悠々と防ぎ、呂布は方天戟を振るう。王彩もそれを避け、また棍を薙ぐ。

数合ばかりも打ち合い、王彩は棍を突きだして距離を取る。内心、己の速さについて来れる者はいないだろうと自負していたため、軽々と防ぐ呂布に驚愕を禁じ得なかった。

棍を握った手に、思わず力がこもる。

これが最強、王勝より強いとは思わなかったが、それでもその強さは感じた。改めて、その称号の重さを理解する。

しかし、このまま軽い攻撃を当てていても勝負は付かない。ならば、更に段階を上げて、己の全力を出していくべきか。

そう考え、王彩は棍を握りなおす。呂布は表情も変えずに方天戟を構える。

王彩は裂帛の気合を発し、一気に間合いを侵略して呂布に迫る。疾風の如き速さに、呂布の表情が微妙に変わる。しかし、それも注視しなければ分らない程に僅かに、だが。

二丈余りの距離を一息で詰めた王彩は、中段に構えた棍を真っ直ぐに突きだす。

唸りを上げて迫る棍の先を、一瞬で見切り左へ一步踏み出し躲す。その勢いに乗り、方天戟を引き絞るように左半身へ持っていき、溜められた力を解放するように、王彩に向けて薙ぎ払った。

風を裂き迫る雷の如き一撃に、避けるのは無理だと見た王彩は、突きだした棍を引いて体の横に立て、来たる一撃を防がんと備える。

——轟雷の一撃が、王彩を襲った。その衝撃は棍だけで防げる訳も無く、王彩の体は一撃の余勢で吹き飛ばされる。

予想していた事とは言え、その一撃の重さに驚愕し、頭が真っ白になっていた王彩だが、壁が迫っているのを見て意識を引き戻し、宙で身を捻り、足を壁に付き、勢いを殺して着する。

先程の衝撃で腕が震え、棍を持つ事もままならない王彩であるが、それでも弱味を見せる訳にはいかないと呂布を見据える。

その目に、『最強』の退屈げな表情を認めた。

「……この程度？」

耳に届いた言葉に、目の前が真っ赤に染まる。侮辱、軽視、嘲弄、軽侮。その全てが当てはまり、その全てがあて

はまらない。声に含まれた響きは、無聊。

『殺』——その言葉が脳裏をかすめたが、同時に敬愛する祖父の言葉が思い起こされる。

——心をどれだけ燃え滾らせようと、頭は常に冷静に。

そう、冷静さこそ、王彩が彼女に勝つために必要なもの。

卓絶した剛力には、小手先の技術では敵うべくもない。しかし、その剛力に頼っているが故の隙を突くには、常に冷静でいる事が絶対条件。

もし怒りに我を忘れ、ただ突っ込むだけの猪武者になってしまえば、一撃の下に命を散らすことになるだろう。

心に蘇った言葉を口中で小さく呟き、静かに棍を構える。

怒りも恨みも憎しみも忘れ、例え人に侮られようと心を動かすな。まるで、仏門の教えのような言葉である。

しかし、激情家である王彩に、この教えを遵守する事は難しかった。今までは怒りに任せて打ちかかっても勝てる相手と戦っていたのが、王彩にとつての不幸である。

武術とは、ただの殺人術ではない。己を高める事にこそ真価はあり、勝敗はそれに付いて回るだけの小さな付録。

王彩が王勝に教えられたのは、正しく『武術』だった。

しかし、王彩はそれを理解していなかったのだ。王勝の遺言も重なり、狂気と妄執から視野は狭まり、独善的な人間となってしまう。いつか理解する日も来るだろうが、今はまだその時ではない。

「……まだやるの？」

「ええ勿論、ここで止めるなんて選択肢はありはしない」

「……………そう」

呂布はそれ以上語らず、静かに方天戟を構える。

次の一撃にて沈めてくれよう、そう考えての、大上段構えである。本来ならば、隙の大きい上段に構える事は無いのだが、この時ばかりは違った。

早く終わらせよう、つまらない、お腹が空いた……。

様々な思考と、それらから来る油断と慢心。呂布は、王彩を侮っていた。

王彩も、構えを見た途端に理解した。

先程までの彼ならば、怒り狂っていただろう。嘗めているのか、と。しかし、今は違った。心は落ち着き、明鏡止水の境地に一步足を踏み入れている。未だ妄執に囚われている王彩では、明鏡止水の境地に辿りつく事は不可能な筈だった。

だが、最強の武を誇る相手と戦い、祖父の言葉で豁然と悟り、それをきっかけに一時的には言え、その境地に辿りついた。

上段で来るのならば、と王彩は棍を中段に構える。

なんの技巧も凝らさずにこそ、最高の一撃は放てる。呂布との手合わせで身をもって知ったそれを、即座に実践する大胆さと柔軟さこそ、王彩の強味。

—— 静寂に包まれた場に、一陣の風が吹いた。

二人はほぼ同時に跳び出し、床を踏みぬくかの如き勢いで互いの間合いを侵略する。

まるで疾駆する虎か獅子か、二人の速さと勢いを見た者は、そう評するだろう。それ程の勢いでもって、互いに迫る。

呂布の腕が一瞬ぶれ、方天戟は目にも止まらぬ速さで振り下ろされた。

轟と風を裂き、雷の如き勢いで頭蓋を砕かんと迫る方天戟に、

—— 王彩は何も焦ることなくそれをじつと見て、棍を上突きだした。

棍の先が方天戟の刃に、柄が地面に刺さる。

それはまるで、獣の顎を閉じまいとさせるように、地面と方天戟との間で棍が双方を支え、一寸たりとも動かない。

驚愕に目を見開く呂布の腹部に、全力を込めた蹴りを放つ。

鈍い音を響かせ、呂布は吹き飛んだ。それと同時に、支点が無くなり棍が倒れ、王彩も共に崩れ落ちる。

棍を握っていた指の股が裂け、血が吹き出る。もう棍は握れない。これで呂布が立ち上がったても、王彩は立ち向かう事が出来なくなつた。

そも、あの技の構想は、王勝が元である。

避けるか防ぐか、どちらかであろうと予測している相手の隙を突き、

棍を地面と得物の間に入れることで受け止め、蹴りを放つ。
余りにも奇手、余りにも奇策。対人限定の、一度限りの隠し玉。

驚異的な動体視力と、命すらも投げ出す豪胆があつてこそその絶技。
それはまるで蛮勇のようで、しかし必殺を伴う剛勇。

常人であれば内臓も弾け、肋骨すらも砕けて絶命する一撃。

これで終わるか、と。王彩が立ち上がって考える。

ここで呂布が立てば、己は負けると理解している。立つな、寝てい
ろ、もう終わりだ。そう願ひ望み祈った。

——それでも、最強は『最強』だった。

壁にもたれかかり、微動だにしなかった呂布が、立ち上がった。

退屈げな表情は消え、目はギラギラと光を湛え、まるで獣のよう。

全身から気迫が漏れ、闘気が立ち昇る。

その目に見つめられ、ゾクツと全身の毛が逆立つ。強者と弱者、そ
れは屠る側と屠られる側のような、絶対的な関係を想像させた。

手を見る。指の股は裂け、血が吹き出していた。棍は握れない。先程
のような隠し玉ももう無い。ただ実力のみで対処するしかない。

だが、棍が握れずとも、反撃の手立てがない訳ではない。なにも武
器は、得物だけではないのだ。己が手足すらも、武器となりえるの
が武者者。

鍛え上げられた肉体は、それこそ凶器。拳脚を振るえば、肉体をい
とも容易く破壊する。

「は、ははは……流石は最強、私の及ぶところではないか。ああ、しかし慢心も驕心も自負も矜持も、全てを打ち砕かれて、私は初心に帰る事が出来た。貴女に感謝するべきですね。ありがとう、呂奉先殿」

「……………恋も、お前を嘗めてた。謝る」

「いえいえ、どうせ私は貴女に及ばない。その礼には値しませんよ」

手合わせを始めた時のような狂気と妄執に囚われていた王彩はおらず、心からの笑顔を浮かべて呂布と話す彼がそこに居た。

呂布も、そんな王彩を見ていると、獣のような眼光は薄れ、方天戟を握っていた手も緩む。

自然と二人の心から、戦意は消えていた。

どちらともなく近づき、互いに頭を下げる。二人の心には、相手の腕を称賛する気持ちが溢れていた。

ふと外を見ると、空が赤く染まっていた。

そろそろ帰ろうかと、いつの間にか座り込んで話していた王彩は、立ち上がり呂布に暇を告げた。

また会おうと再会を期して、王彩は外に出て汗血馬を牽いて城門へ向かった。

城門付近では、なにやら衛兵が殺されたと騒いでおり、刺客ではないか、下手人を探せ、などと衛兵たちが叫んで指示を出していた。不思議に思ったが、よくよく思い出せば自分が殺していたのだと気

付いた。

自分の仕業だと発覚したら面倒になるのではないか、そう思って汗血馬を牽いて何事も無かったかのように城門をくぐろうとする。しかし、巨大な体躯の汗血馬に、明らかに凶器になりえる棍。この二つを見て、止めない人間がいるだろうか。少なくとも、衛兵に止めないという選択肢はなかった。

「失礼、少しお話を聞かせて頂きたいのですが……」

声をかけられた王彩は、内心舌打ちしながら振り返る。当然の如くに、その面にはにこやかな笑顔が浮かんでいた。

「はい、なんでしょうか？」

「実は午の刻頃に、ここで一人の衛兵が殺されてね。死体と傷を見るに、長柄……そう、丁度貴方が持っているような棍が凶器らしいですよ」

その言葉を聞いて、誤魔化しようがない事を悟った。

いや、幾つかこの場を切り抜ける方策も浮かんだが、どれも棍と汗血馬を手放すしかない下策。それを選択する事は出来なかった。

衛兵が、槍を握った手に力を入れたのが見えた。言葉で惑わすのは無理だ。強行突破しかない。

そう覚悟し、衛兵の口が開いた瞬間、右腕を振るい棍を回し、衛兵の後頭部に当てて気を失わせる。その光景を見ていた周りの衛兵は、王彩が下手人だと確信して口々に何事か叫んで槍を振り上げ迫る。

それを横目で見た王彩は、無視して汗血馬に乗って走らせた。

もう洛陽に居られない事を理解し、王彩は次なる目的地を決める。食事処で話した男たちの言葉が蘇る。なにも聞いたのは呂布の事だけではない。大陸各地の有力諸侯や名門貴族、天下に名を知られる武人の情報も逐一調べ上げて聞きだしていたのだ。

都・洛陽から最も近い場所、それでいて武人もいる都合のよい地。そう考えて、王彩は一つの郡を思い出す。即座に決めた。

——次なる目的地は、陳留郡。刺史・曹孟徳にまみえん。

第八話（後書き）

一つの節目、王彩挫折。

狂気も薄れ妄執からも解放、少し早すぎたか。最強の志は曇ることなく、これからも邁進し続けます。

一つ聞きたいのですが、自分の文章は堅いでしょうか？ もしくは読みにくい、など。

少し、これからの方針を考え直してみます。お答えくださると幸いです。

第九話（前書き）

少し長くなってしまいました。

本作品は読みやすさを重視している筈なのに、なんとも申し訳のないことです。

あと、許チヨのチヨの字が環境依存文字だという事に気付いた。どうしよう……。

ついでに調べたら、荀イクのイクもだった。絶望した。

第九話

洛陽を発つてより、早幾日。

連日連夜、都からの追手を恐れては夜通しの強行軍。権勢を恐れず権力に屈せず、官など齒牙にもかけない王彩であるが、それでも官の厄介さは知っている。

金と出世のためなら、無辜の民を賊に仕立て上げて功績を捏造する事も躊躇わない。腐敗しきった王朝に、正義など存在しなかった。ましてや慈悲と人道など、言わずもがなである。

一度捕まれば、それこそ極刑、斬首か腰斬か四馬分屍か。どれをとっても、多大な苦痛と恐怖を伴う罰である。慈悲など期待できる訳も無い。

それに、この時代の処刑といえば、民への見世物になっている背景もある。民とて、数少ない娯楽として期待している。もしも捕まれば、逃げ道など無く、大人しく死を待つしかないのだ。

これらの事を、王彩は王勝に聞いていた。

そもそも、王彩は華山からほとんど下りた事が無いのに、どうして世間のことを詳しく知っているのかと言えば、やはり王勝の教育の賜物である。

無駄な知識ばかりを教えているようで、生きる為に必要な事もしっかり伝えていた王勝。王彩は王勝のおかげで生きている、そう言っても過言ではない。

そうして王彩は、王勝の言を信じて、追手から逃げ続けた。

しかし、ここまで必死に逃げる必要があったか。そう聞かれれば、否としか答えられない。

先に述べた事を思い出そう。王朝は既に腐敗しているのだ。そして、官は民を賊に仕立て上げるのも躊躇わない。これらの事を総合すれば、自ずと答えは見えてくる。

そう、たかだか衛兵一人を殺した人間の為に、人員を割いて追手など出さないのである。

何故、地方の役人は民を賊に仕立て上げて功績を捏造するのか。

それはつまり、力が無いからだ。賊を、正規軍だけで討つだけの武力も意気も正義も。彼らには、全てが欠けている。

だからこそ、功績の捏造。だからこそ、売官等の銅臭政治。

言ってしまうと、衛兵を殺しただけの男に追手を出すくらいなら、無辜の民を賊に仕立て上げた方が、よっぽど楽で、出世は早いのだ。たった一人の罪人を捕えるのか、大規模な賊を捕えるのか。二つを天秤にかけた時、前者を選ぶ人間など居る訳もなかった。

暗愚な皇帝は奸臣を呼び、奸臣は王朝を腐らせ、腐敗した王朝は天下に乱を呼ぶ。

それは歴史が証明し続けてきたこと。真理にして真実、事実であり現実。

——もう間もなく、天下は乱れ激動の時代が訪れる。

有りもしない追手から逃げ続け、本来よりも遥かに早く、王彩は陳留郡へと入った。

日に千里を駆けると言われる、さしもの汗血馬も疲労困憊、足は萎えて走る事もままならないようだ。

それに乗る王彩とて、日に日を継いで、食事の時間も惜しんで駆けたのだ。その疲労は推して知るべしである。

汗血馬と自分の疲労を考えれば、ここから更に急ぐのは無理だと判断し、下馬して歩く。

辺りを見回しても、目に付く物は特に何も無かった。それもその筈で、この時代、そこかしこに都市や村があるなんて有り得ない。

一つ村を見たら、そこから一日馬で駆けても村が無いことだってあるのだ。何も無い事など、余りにも当たり前で、特筆することもなかった。

普通の人間であれば、村がないのなら、と野宿するだろう。しかし、王彩は普通ではなかった。ずば抜けた視力を誇り、遙か一里先の人の顔すら見分けるのだ。

人間離れたその視力で、遠く地平線を望む。

——数軒の家が見えた。

汗血馬を牽いて、ゆっくりと進む。

陽はまだ地平線に沈んでおらず、夜まで時間もある。急ぐ事も無いだろうと、ゆるゆると歩を進める。

汗血馬が低く唸る。何故乗らないのか、自分はまだ走れる、その意志が込められていた。豪気な事である。正しく稀代の名馬。

しかし、王彩はそれを断った。乗っていただけの王彩と、王彩を乗せて夜通し駆け続けた汗血馬。それを考えた時に、王彩に汗血馬を鞭打つなどという選択肢は無かった。

歩き続けて五里余り。やつのことで村の入り口に辿りついた。急いでいなかった事もあり、もう空は暗んでいた。

入って今晚の宿でも確保しようかと思つて一歩踏み入れ、首筋の毛がぞわりと逆立った。

汗血馬もそれを感じたのか、王彩の言葉を聞かずに前へ駆ける。王彩も、全力で右へ跳んだ。

——同時に、鉄球が王彩の居た場所を直撃、地面が爆ぜ砕けた。

衝撃と烈風で空中に浮かんだ王彩に、弾け飛んだ小石が当たる。それはまるで散弾銃のようで、思わず苦悶の声を上げる。

それでも身を捻り着地し、地面に叩きつけられることは無かった。作り笑顔が得意とは、即ち感情抑制及び表情制御が得意という事。無表情のままに棍を構え、襲撃者を見る。宵の薄闇に、小柄な人間の影が見えた。手には、得物であろう鉄球を持っていた。まるで剣玉のようなそれは、どう見ても小柄な人間が扱うようなものではない。

雲に隠れていた月が、その姿を現した。

襲撃者の姿が見える。棍を向け警戒していた王彩だが、その姿を見て驚いた。

桃色の髪が月明かりに映え、その小柄な体軀はそれこそ子供。手に持った鉄球は、少女が持つには無骨すぎ、何より大きすぎた。

「……………子供？」

「こ、子供じゃない！ 立派な大人だ！！」

「……………そいつは失礼、こちらの落ち度だ。謝罪しよう」

「え、いや、こっちこそそんな……………」

何故か互いに頭を下げ、謝りあう奇妙な光景に、戻ってきた汗血馬が一つ唸る。まるで呆れているような、そんな響きをはらんでいた。その声に、王彩は弾かれたように跳びすさり、汗血馬の下へ一瞬で移る。今そこで頭を下げたとは思えぬほどに、俊敏な動作だった。

それを見て、思わず茫然としていた少女だが、やはりこちらにも俊敏な動きで後ろへ跳び、鉄球を手にもえる。

「さて、こちらとしては、いきなり襲いかかってきた理由を聞いた
いんだが」

「お前みたいな野盗を村に入れないためだ！ 残念だったな、僕が
たまたま外に出てたから、これでお前らは村には入れないぞ！！」

なにか誤解している。ひとまず、それだけは理解できた。
急に頭が痛くなって、こめかみの辺りを揉みほぐす。汗血馬も、ま
るで言葉を理解するかのように、王彩の気持ちに気付いたのか小さ

く唸った。

誤解だ、そう告げようとして、後ろから聞こえた足音に思わず振り向く。

振り向いた先には、鋤や鍬を持った男たちが、敵意も顕わに王彩を睨んでいた。

それを見て王彩は、事態がこじれる、と溜息を吐いた。
男たちの姿に一番動揺していたのは、少女だった。何故か困惑したように、それでいて焦りを見せて男たちに向かって叫ぶ。

「皆、なんで来たの！？ 危ないから家から出ちゃダメだって言っ
たじゃんか！」

「そんな事言ってもなあ。季衣ちゃんに任せて、家の中で震えてる
のは、どうにもなあ」

「そうそう。俺らが勝手にやってる事だ。季衣ちゃんは気にすんな
って。自分たちの村は自分で守る、そんだけさ」

「みんな……………」

自分を挟んで繰り広げられている感動劇に、げんなりとして溜息を
一つ。

まるで、自分が野盗のような物言いではないか。誤解にも程がある。
しかし、この雰囲気で言い出すのはどうにも気まずい。

いろいろと考え、結局また憂鬱になって溜息を吐いた。汗血馬が頬
を舐める。王彩に理解者は彼女しかいなかった。

汗血馬と心を通じ合わせていた王彩が前を見ると、少女が目を怒らせて彼を睨んでいた。

どうやら感動劇は終わったようだ、やはり溜息を一つ。棍を構えるのも億劫になり、肩に掛けて足をぶらぶらと揺らす。

少女はそれを見て、更に眉を吊り上げる。馬鹿にされているのかと、鉄球を振り回して攻撃態勢に入る。

「さあ、武器を捨てて大人しく捕まれ！」

「……やれやれ。誤解だ、と言っても聞かないんだろうな」

「何をぼそぼそ言ってる？ 武器を捨てないなら、僕が捨てさせてやる！！」

王彩の言葉を待たず、少女は鉄球を振り上げ王彩に走り迫る。

致し方なしと、溜息を一つ。溜息を吐くのが、どうにも癖になっている王彩だが、それも仕方ないのかもしれない。

誤解を晴らすには、とりあえずは少女を打ち倒し、無力化してから話を聞かせるしかない。そう判断して、棍を中段に構える。

力で押し伏せる、それが第一に来る辺り、やはり王彩の思考に変化は無かった。だが、とりあえず殺す、と考えないのは大きな進歩だろう。

天にも轟く気合と共に、鉄球が振り下ろされる。

少女の細腕のどこにそんな力があるのか。成人した男よりも重いであろう、優に三百斤はありそうな鉄球を、腕一本で操っている。

天より与えられた、群を抜いて優れた剛力。あの呂布にも勝るとも劣らない神力である。

王彩はそれを冷めた目で見て、前へ跳び出す。

一気に間合いを詰め、鉄球を振るって隙だらけな少女に迫る。間合いに入り、同時に棍を振るおうと腕を引いた、

――刹那、強烈な悪寒を感じて左に跳ぶ。

地を無様に転がり、起き上がった王彩が見れば、少女の手元には鉄球があった。

今のたつた一度の攻防で感じた。自分に劣らぬ程に、強い。

種明かしをすれば、少女はただ鉄球を引いただけだ。

だが、片手ですら風を裂く程の速さで振るえる鉄球を、両手で引いたらどうなるのか。

凶悪なまでの剛力で引かれた鉄球は、振り下ろされた時よりも速く、王彩の体を粉々にせんと迫った。

しかし、王彩もさる者、呂布との戦いで更に磨かれた直感で、咄嗟に避けた。

もしも避け切れていなかったなら、全身の骨を砕かれた王彩が地面に横たわっていただろう。

「……やるな、お前。賊のくせに、凄い速いじゃんか」

「お褒めに預かり恐悦至極……さてさて、面倒な事になってきた」

「だけど、僕には敵わない！ 大人しく捕まれえ！！」

口中で小さく呪詛を呟き、迫りくる鉄球を避ける。

力勝負で敵わない事は、得物を見ればすぐに分かる。何より、呂布との手合わせで身を以て体験した。そして、感じた。

王彩に力任せの戦いは出来ない。圧倒的に腕力が足りないのだ。それは天より与えられたもので、これから克服できない絶対不変のもの。

ならば、どうするか。

決まっている。技術と速さで、勝利をもぎ取る。それしか道は無い。陳留郡までの行程で、王彩は覚悟していた。

絶対的に腕力で及ばないのなら、一撃も当たらなければいい。力でこり押ししてくるのなら、その全てを逸らして反撃すればいい。

地に足を着け、同時に跳び出す。

少女の間合いを侵略し、壇中を突かんと、棍を構えて刺突を送る。

——唸りを上げて迫る棍が、銀の光に弾かれた。

棍を通して伝わる衝撃に、思わず驚愕して後方へ跳ぶ。

振り回される鉄球が、少女の周りに大きな円を描いていた。

まるで、一つの空間を形成している。一歩足を踏み入れれば、全身の骨を粉々に碎かれ屍を晒す事になる、破壊空間。

さしもの王彩も、そこに踏み入るだけの勇氣を持ち合わせてはいない。勇氣どころか、それは蛮勇である。

「ほらほら！ そっちが来ないなら、こっちから行くよ！！」

頭上で円を描いていた鉄球を、勢いそのままに王彩めがけて薙ぎ払った。

砂を巻き上げ迫る鉄球を、上空に跳ぶことで躲す。

——しかし、それは悪手。

少女は鉄球を大きく振り回し、勢いを殺さず、空中にいる王彩めがけて飛ばす。

さしもの王彩でも、空中でそれを避ける術は無く、棍を構えて迫りくる一撃に備える。それは、王彩本人に既視感を感じさせるほどに似た状況。

そして、王彩の体は吹き飛んだ。

当然の如くに、空中でなにも支えが無いのに大重量の鉄球を防げる訳も無く、紙のように無様に宙を舞う。

空中で身を捻り、着地する。

腕の震えが酷い。棍を握っている事すら難しく、今にも落としてしまいそうな程だ。

指の股から血が吹き出る。ふさがり切っていなかった呂布戦の傷が、今の衝撃で開いたようだ。思わず舌打ちを漏らす。

少女の方を見れば、またも銀光が頭上に円を描いていた。

頭上で回っているのなら、気にせず腹部を突けばいいではないか。そう思う者も少なからずいるだろう。多少なりとも武を嗜んだ者なら、まず考える事だ。

しかし、少女の体軀を考えて欲しい。そう、並の男より遥かに小さく、それこそ胸までも無いのだ。

そんな身長で、頭上に鉄球を回したら、どうなるか。これは言わなくとも分かるだろう。

あれを破るには、少女に匹敵するだけの力が必要だ。それは王彩に無いもの。ならば、王彩があれを破るのは、無理なのか。否、それは否である。なにも力こそ全てではないのだ。

力だけが全てなど、王勝に聞かせたら烈火の如くに怒る言葉である。武術とはなにか。それは、力で劣る者が力で優れる者に勝つために作られたものだ。

太極拳然り、柔術や合気道然り。

暫し考え、一つの策が思い浮かんだ。

脳内で相手の行動を予測し、破綻が無い事を確信する。

いや、一つだけ問題がある。それは、己の命を投げ出す覚悟がいることだ。失敗すれば、待っているのは、死。

だが、それは今までにもあったこと。

あの手合わせで、『最強』から一本取れたのは何故だ。そう、命を懸けた奇手があつてこそである。

一つ小さく笑い、少女に近づいていく。

後ろから襲いかかるうとしていた男を、壇中に棍を突き当て気絶させる。

それが少女には、王彩が男を殺したように見えたようだ。怒りの叫びを上げる。

「お前、よくもおじさんを!!」

「はっ、殺したからなんだってんだ？ お前も俺を殺したいんだろ

？ ほら、同等な条件じゃないか。殺し殺され、この世は回ってんだ。人を殺したいなら、自分に近い人間が殺されることくらい覚悟しとけ、クソガキ」

王彩の言葉に、少女は怒りを爆発させた。

顔を真紅に染め、血が沸き立つような激情に身を任せる。眼光は鋭く獣の如し。そこに、先程までの少女は居なかった。

王彩の前に立つのは、一頭の獅子。

冷静さを失った、それを確信して王彩は跳び出す。

疾風の如くに間合いを詰め、棍を思い切り引く。渾身の力で少女の腹部を貫こうとし、鉄球が横合いから飛んできた。

その速さは、正しく暴風。王彩の挑発もあり、先ほどよりも幾分か速い。それこそ、予測していた王彩が少し焦るほどに。

――暴風の如き銀光の一撃が、王彩を薙ぎ払った。

四肢を碎かれ屍を晒すか、そう思わせる程に凶悪な一撃が王彩を襲った。

鉄球が過ぎ、そこに王彩の姿は無く、かといって上空にも王彩はいなかった。殺したか、少女が憤怒に燃える心で少し思った。

そう、それは正に、一瞬の油断。

――残念無念、死んだと思ったか？

後ろから聞こえた声に、驚愕と共に振り返る。

が、その前に首筋に衝撃を感じ、目の前が真っ暗になり少女は意識を失った。

少女の後ろに立っていた王彩は、手刀の形にしていた手を開き、溜息を一つ。

精神的にも肉体的にも、疲労の限界を迎えていた王彩は、地面に座り込んで夜空に浮かぶ月を眺めた。

さて、王彩が何故少女の後ろに立っていたのか。種明かしをするまでも無く、見ていれば気付く者は気付くだろう。

それ程に単純で、しかしそれを選択する者がいない程に無謀な手。

鉄球が体に迫った刹那、王彩は咄嗟に足の力を抜いて屈み、地面にしゃがみ込んだ。

胸の高さに薙ぎ払われた鉄球をやり過ぎ、頭上を通り過ぎる鉄球をじっと見つめ、瞬時に手を伸ばす。

その驚異的な動体視力で捉えたのは、鉄球を繋ぐ鎖だった。

鎖を握り、腕が抜けるような衝撃に耐えて、王彩は空中へ舞い上がった。

少女の背後に鉄球が回ったと同時に、その手を離して着地。しかし、その場に突っ立っている訳にはいかない。即座にしゃがむ。頭上を、一回転した鉄球が通り過ぎた。

それをやり過ぎ、手を手刀の形にして、王彩は小さく呟く。

「残念無念、死んだと思ったか？」

びくつと震え、振り向こうとする少女の首筋に、一撃。
少女は気を失い、地面に崩れ落ちる。

これが、王彩のとった策だ。挑発のために少女が冷静さを欠いていたからこそ、成功した離れ業。
やはり奇手、まさに奇策。真っ向から打ち破れないが故の、虚を突いた絶技。

こんな命を懸けたような奇策でしか相手に打ち勝つ事が出来ない己に、思わず溜息を吐いた。呆れる、なにが最強だ。

夜空には、煌々と光る月が王彩を見下ろすように浮かんでいた。
それをじっと見て、溜息とともに小さく呟く。

「はぁ……死ぬかと思った」

第九話（後書き）

書いてて思った。なんか王彩弱い、逆に季衣強い。なんて爽快感の無い勝利なんだ……。

今年の更新は、これで最後になります。

来年は、三日か四日に更新再開する予定です。拙作を読んでくださった方には多大な感謝を。

いつの日か、猫年が来ることを信じて。それでは皆様、よいお年を。

第十話（前書き）

執筆開始は三日前。その間、執筆中にデータが消えること八回。内、己のミスでデータが吹っ飛んだのは五回。このドジっ子めっ。てへっ

——死ねばいいと思うよ。むしろ死にたい。

第十話

夜も更け、暗い空には満月が浮かび、煌々と大地を照らしている。雲は月を隠し、そしてまた流れては月の光を地へと届ける。非常に美しい景観、惜しむらくは、眺め賞する人間の居ないことか。

時は後漢末、孝靈皇帝の御代。

腐敗した朝廷が天下を治める、艱難辛苦の時代。民は苦しみ、その日を暮らすも辛き中、伏魔殿と化した朝廷に蔓延る宦官奸臣は、この手あの手で金儲け。

民の苦しみなど知った事ではないと、権力と財物に塗れて今日を生きる。

所は陳留郡、農民の住むとある村。

周りは畑に囲まれて、なんの変哲もない民百姓の村である。

その村の一角、最も大きな家の中から、男たちの騒がしい声が漏れていた。

村で一番大きな家は誰の物か、そんなことは聞くまでもないだろう。無論、村長の家である。

本来村長の家は、重要な会議や一年の始まりを祝す時のみに使われるが、今回は例外であるらしい。

現に大広間には沢山の男たちが集まり、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎだ。

車座になった男たちは好き勝手に飲んで騒いでいるが、幾人かは一人の男に酒を注いでもてなしている。

ほとんど無礼講状態ではあるが、上座に座り男たちの歓待を受けている若い男。

その場において、明らかに毛色が違っていた。
むさ苦しい男たちばかりの中に、一目見ただけで出身からして違っ
たろうと感じさせる出で立ちと雰囲気。

高家の出なのではないかと思わせる端正な顔立ち、上質な布を使っ
ている訳でもないだろうが、作りからして違う洗練された衣服。
そこに座っているだけで滲み出る気迫。それは決して、男のように
若くして身につけるものではない。数十年の鍛練を積んだ達人が無
意識に放つような、圧倒的な存在感を伴う風格を漂わせている。

一人の男が、思い出したように若い男に名を尋ねた。
男は静かに、しかしある種の誇りを持ってそれに答える。

——華山仙人が弟子にして孫、王華山である、と。

時は遡り、およそ半刻前。

許？を打ち倒して地面に座り込んでいた王彩に、男たちは殺気立っ
て近づいた。先に殺された男に続いて、今度は許？までも。

男たちにとって、許？は娘であり、姪であり、また誇りであった。

賊と戦っていると聞き、矢も盾もたまらず飛びだし、賊に立ち向か
おうとした。しかし、あろう事か許？は、自分たちの目の前で殺さ
れてしまったのだ。

怒り憎しみ、殺気に身を委ねて己の手に持った、頼りなき武器を強
く握る。その姿はまるで幽鬼、生者の命を奪おうとする死者。

許？を打ち倒した王彩の武芸を見ても、尻込みすること無き勇氣ある一人の男が、手に持った鋤を振り上げる。

その頭蓋、叩き割ってくれんとばかりに、渾身の力を込めて振り下ろそうとした瞬間、疲労の為にか細いが、芯の通った強い声が飛んだ。

曰く、二人は死んでいない、と。

逆上した男にその言葉は、火に油を注ぐようなものだったが、男たちの中で一人、冷静さを保っていた者がいた。

その壮年の男は、大喝一声、王彩を殺さんとしていた男の動きを止めた。男の顔には、恐れすら浮かんでいる。

それもその筈、壮年の男は村長の息子であり、許？に武芸を仕込んだ人間であるのだ。

彼女の天分が並外れていたため、師事して数年で彼女は男を越してしまっただが、それでも村の者は男に頭が上がらない。

そこからはとんとん拍子で話が進み、氣を失っていただけの男は目を覚まし、許？は壮年の男が家へと連れ帰った。

いきなり殺されかけていながら、二人の命を奪わなかったのは大いなる仁徳である。壮年の男は王彩を賞賛し、家に招いて村を挙げてもてなした。

そして、現在の騒ぎへと至るという訳だ。

王彩の隣に座り、手ずから酒を注いでやる壮年の男。

他の男たちは好き勝手に騒いでいる中、彼だけが王彩をもてなして

いた。既に王彩の歓待をしているというよりは、お祭り騒ぎと化しているその場を見て、男は一つ溜息を吐く。
それに苦笑して、王彩は男の杯にも酒を注いでやるのだった。

「まったく、季衣は血気に逸りすぎだと常日頃から言い聞かせているというに。それでも治らず、華山殿には大変ご迷惑をかけてしま
い……」

「過ぎた事です。お気になさらず」

酔いが回ったのか、何度も同じ事を繰り返す男に、流石の王彩も苦笑いを隠せない。

その王彩だが、注がれる酒を全て飲み干して尚、素面であるという酒豪ぶりを見せつけている。

幼少の頃より、王勝に付き合っただけあって、飲酒歴は十年以上に渡る。素養もあつたらしく、今では並の大人を遙かに上回る酒豪である。

どうやら男は絡み上戸だったようで、同じ事を何度も話しては王彩に謝る事を繰り返している。

王彩はそれにいちいち反応してやり、干しては注がれる酒をひたすら飲んでいた。

酒が何順しただろうか、男たちの大半が酔い潰れている夜半頃。
突然に廊下の方から忙しない足音が響き、顔を真っ赤にして焦燥に駆られた表情の許？が飛び込んできた。

広間で酔い潰れて楽しそうに笑っている男たちを怪訝そうに見つめ、

王彩の姿を認めた瞬間、その目が憤怒に燃えた。王彩とて、許？が広間に飛び込んできた時から、腰を浮かせていつでも動ける体勢になっている。

得物が無いとは言え、その剛力は王彩の遠く及ぶところではない。しかし、無手での戦闘に関しては、王勝に鍛え上げられているために、許？の遙か上に行く。

王勝の教えにより、何時いかなる場合でも敵と相対できるよう、日常の物を己が武器とする術すら身につけているのだ。

目を血走らせ、雄叫びを上げて迫る許？に向けて、王彩は手に持った酒杯を投げつける。

中の酒を一滴も零すことなく、杯は空を滑るように飛ぶ。その勢いたるや、まさに地を掠め飛ぶ燕の如く。

それには許？も冷静さを取り戻し、猛然と横へ跳ぶ。しかし、王彩はその動きを予測していた。

杯を投げると同時に、許？が避けると踏んだ方向へ跳び出し、風の如くに背に回り、足を払い腕を取って床に押し倒す。

腕を背に回し関節を極め、完全に無力化したと確信して大きく息を吐いた。

許？の剛力を、王彩が上から乗り腕を締めた程度で抑えられるか。普通は無理である。しかし、王彩は普通ではなかった。普通である筈もなかった。

彼が祖父から伝授された武芸の一つに、『点穴』というものがある。全身に存在する経穴を衝くことにより、経脈を遮断して身体機能を封じる武術の奥義であり、特定の経穴を衝けば死にも至らしめる恐ろしい技である。

王彩は許？の背後に回った時、彼女の剛力を危惧して素早く点穴を施していたのだ。

己の意思に反して、反するだけの意思も届かぬ肉体を地に晒して許？は王彩へありつたけの罵詈雑言を飛ばす。しかし、口汚い訳でもなく、幼子が無理をして人を罵倒しているような、奇妙な違和感がある。

己の下で喚き叫ぶ許？を無視して、呆けたように眼前を見つめる王彩。その眼にはなんの感情も思考も無く、まるで魂が抜けたように背後から、足音が近寄る。色の無い瞳に、鮮やかに煌めく光が宿った。足音の主を確認するため、後ろを振り返る。許？の師——宋康であつた。

「華山殿、またもご迷惑をおかけしたようにて……………千言を弄しても足りぬ、私の不徳です。誠、申し訳ござりませぬ」

「いえ、特に怪我もしてませんので、貴方がお気に病む事でもありません」

なんでもない事だと、手を振って宋康に言うが、彼は尚も言い募る。王彩はそれほど根に持つ性質でも無く、物事に余り関心を持たない淡泊な人間である。であるから、宋康がしつこく同じ事を繰り返すにつれて、王彩の目は据わり、あからさまに面倒がつている雰囲気を出し始めた。

宋康もそれと悟ったか、それならば、と話を切り上げて王彩の手を取って立たせてやる。

王彩は宋康の手を取る前に、己の椅子となっている許？の、封じた経穴を開いた。

許？は身体が動くとなり、跳ね起きて王彩から距離を取る。しかしその瞳には、何故師がこの野盗に丁重に接しているのかという疑問が浮かんでいた。

困惑に視線を彷徨わせている許？に、宋康の打って変わった厳しい声が飛ぶ。

「季衣、何度言ったら分かるのだ！ あれ程血氣に逸るなど言いつけたらう！」

「で、でも師父……コイツは夜に村の近くをうろついて――」

「それが血氣に逸っていると言うのだ！」

宋康は眉を逆立て怒声を発する。

王彩と話していた時のような知識人然とした宋康はおらず、弟子を叱りつける威厳ある師の姿があった。その師弟の様子を見て、ふと王彩の目に涙が浮かぶ。

ありし日の己と祖父のようで、ただ悲しく、昔日の思い出に心馳せる。

――我に返り、袖で二人にばれぬようそつと涙を拭う。

涙もろい己に苦笑いし、また舌打ちするのであった。

しょんぼりとした許？と、一通り叱責を終えて息をつく宋康。

落ち込み目に涙すら浮かべている許？を見て、宋康は溜息を吐き、

弟子の頭をそつと撫でた。

顔を上げた許？に、少し笑いかける。涙に濡れた顔に、笑顔がこぼれた。

厳しく当たるとは、即ち愛情を向けているという事。厳しくあればこそ、許？への愛情はひたすらに大きい。宋康にとって、許？は娘のようなものだから。

宋康は、王彩に謝罪するよう許？に言う。許？も、決して愚かではない。素直に己の非を認めて謝ることの出来る人間だ。

ただ、思い込みが激しく、激すると周りが見えなくなるのが欠点なだけで。

「僕が悪かったです……本当にごめんなさい」

「いやなに、気にするな。怪しい風体の俺が悪かったんだ」

怪しい風体であつたと言うが、決して言うほど怪しい訳ではない。

確かに並外れて巨躯の汗血馬を牽き、手に棍を持っていたが、野盗のような人相でも無く、しつかりとした服装もしていた。

野盗に間違えられたのは、ひとえに許？の早とちりである。

しかし、王彩はそれを言う事は無かつた。相手は子供であり、己は大人。ならば、年上が譲ってやるのが礼儀だろう。

——というのは建前で、言葉の応酬が面倒だっただけである。

世の中には、知らない方がいい事もあるという一つの例だ。

王彩の配慮に、許？も宋康も気付いた。

許？は深く恥じ、宋康は深く感謝した。なんと義に溢れる、仁勇揃った大丈夫であることが。

尊敬と敬服の眼差しで王彩を見つめる許？と宋康。王彩はそれをあえて気にせず、いつも通りの笑顔で接するのだった。

第十話（後書き）

一ヶ月以上に渡る放置、誠に申し訳ございませんでした。

いや、弁解の余地ありません。全ては私の不徳の致すところ、甘んじて叱責を受ける所存にございます。

遅滞の理由を三行で説明すれば、

パソコンあぼーん

データがあぼーん

俺の頭もあぼーん

……単純明快簡潔明瞭、なんのことは無い、私の創作意欲の欠如が全ての理由です。

完結の見通しは不明ですが、以前のモチベーションが維持できるのなら、せめて完結まで持っていきたいです。

それが出来ずとも、最低打ち切りエンドには……。

第十一話（前書き）

ちよつと時間があつたので書いた。
あと、環境依存文字を使つてるので、見えねーよバカ野郎とか言つてくれたらカタカナに直すよ。

第十一話

青空には太陽が目映く輝き、雲ひとつ無い快晴である。

陽の光が茫々たる大地を照らし、柔らかな春風が深々と草木を風ぐ。

王彩が宋家村に逗留して数日。

一日の大半を、村人と共に田畑を耕すことに費やしている王彩は、その日も畑仕事に精を出していた。

鍬を振り上げ、重力に逆らうことなく振り下ろす。周りの人間と同じ動作ながら、王彩のそれは風格が漂っていた。

それも無理はない。王彩が祖父と華山で暮らしていた頃は、農作業も一つの修業であり、生活の糧を得る為の大切な営みだった。

握りの一つを取っても、得物の握りに通じ、振り下ろせばそれは器械の一撃に通じる。筋力を鍛える事も出来、華山ではよく行われた鍛練であった。

であるから、王彩は自然と農耕に詳しくなり、世の民百姓と同じ程に農作業に長じているのである。

この村の人々も、最初は貴族然とした風貌の王彩が農業に従事した事などある訳無いと思っていた。しかし、一目見て自分たち並に手慣れていることを知る。

許？に勝る武芸と農業の腕。村民たちが王彩を受け入れ親しくなるのは時間の問題だった。

黙々と作業をこなす王彩の耳に、切迫した叫びが聞こえた。

頭を巡らし、声の方を向く。丁度村の入り口から、見慣れた男が満面を焦燥に染めて狂ったように叫び走っていた。

なにをしているのかと、周りの男たちと同じように呆れていた王彩は、また作業に戻るうとする。

男が近づくにつれて、その声がはつきりと聞こえるようになった。

王彩は何気なく耳を傾け、愕然として振り返る。驚愕とともに、その表情に浮かぶのは呆れ。

—— 曰く、許？が村の外で黒髪の女と戦っている、と。

王彩の胸に浮かんだのは、またか、という気持ち。

思えば王彩も、この村に逗留するきっかけとなったのは許？の早とちりによる戦闘。

王彩からしてみれば、逃げればいいだけの事をわざわざ受けて立ったのは、ただ己の実力を確かめる為の手合わせであった。

『最強』に遠く及ばぬと自覚し、打ちのめされた誇りと自信。それを取り戻すための、言ってしまうえば踏み台になったのが許？。

今では彼女とも仲良く話すようになっていたが、あの晩は内心許？のことを避けたいと思っていたのだ。

若年にして老成した王彩と、天性明朗な許？。その組み合わせは、まるで天がそう決めたようにピタリとはまった。

いくら避けようと思っても、許？の方からひたすらに話しかける。何事にも拘らぬ性質である王彩は、いつしか彼女と深く友誼を結んでいた。

彼女の師である宋康も、それはなによりと喜んだ。

尊敬する王彩と、最愛の弟子の許？。二人が反目しあっていたら、対応に困るのは宋康であり、この村の為にもならない。

宋康は思う。最も良いのは、王彩が許？を娶ってくれることだと。その為ならばと、少しばかりの謀を胸に秘めて。

王彩は、この時も呆れはしたものの、許？の激すると周りが見えなくなる性格をよく知っていたので、自分が行くべきだと悟っていた。こつこつ問題に巻き込まれるのは、王勝と山を下りた時にも何度かあり、きっとそれは定められた王彩の運命なのだろう。

鍬を地に置き、周りの男にきびきびと指示を出す。

一人には、宋康に知らせに行くように。一人には、走っている男を止めるように。一人には、武装させた若い男を周囲の警戒に当たらせるように。

男たちに命令する王彩には、ある種の威厳があった。それは決して武を鍛えただけでは身につくことのない、生まれつきの王者の氣質。

指示を終え、王彩は己に割り当てられた部屋へと走る。

そこは村長の家であり、本来ただの侠客もどきに与えられる待遇では無い。しかし、宋康は彼を尊敬していたし、その胸に秘めた考えもあった。

その為、王彩にこれだけの待遇が用意されるのは、当然だったのかもしれない。

己の得物を引つ掴み、村の入り口に向かって駆ける。砂塵を巻き上げて疾駆するその姿は、大空を翔ける鷲の如く。

途中で汗血馬を呼べばいいのだと気付いたが、その時間すらも惜しいとばかりに地を駆けた。

その速さは、最早常人とは比べものにならない。

一息に数里ばかりを駆け抜け、立ち止まって耳を澄ます。

ずば抜けた聴覚は、右方より聞こえる剣戟の響きを捉えた。許？は近いと、地を蹴り駆けだす。

一里と行かず、許？と見知らぬ黒髪の水を視界に捉えた。二人とも、なにやら激しく叫んでおり、今にもどちらかが激昂しそうな勢いだ。

王彩がここまで来たのは、許？を止める為である。

許？が暴走すれば、相手とて無事では済まない。もし彼女が怪我などすれば、村人が悲しむ。相手の水を助け、許？をも傷つけない。

言葉で言うほど、それは容易くない。なんと言つても、許？と王彩の腕前は紙一重。許？の剛力は、王彩が及ぶべくもないのだ。

多少なりとも水を抜けば、全身の骨を砕かれ地に屍を晒すこととなる。

水を引き締め、手に提げた棍を強く握る。

双方が離れ、一旦息をついた。隙は今しかない、己の最速でもつて飛び出す。

案に相違し、二人は即座に手を交えんと前へ駆け出した。

それに焦つたのは、当然の如くに王彩。先程から見ていたが、相手の水も許？と打ち合うほどの怪力の持ち主。

何故、水ばかり力が強い人間が多いのかと、世の無常を嘆いていた王彩は、両者の間に呼び込む事を恐れた。

掠るだけでも、四肢は砕かれかねない。いや、まず間違いなく水を散らすだろう。

二人に迫る王彩は、覚悟を決めた。

掠れば命は無い。ならば、少しなりとも当たらなければいい。脳内で二人の行動を予測し、それに己の速さを考えればギリギリで間に合う。

棍を強く握りしめ、それを緩める。力を入れるな、速さが落ちる。

ただ純粹に、今は速さだけを求めて。

一気に加速し、両者の間へ飛び込んだ。

二人の顔が、驚愕に染まる。王彩はそれを横目で見て、頭上に迫る許？の一撃を躲す。黒髪の女の得物は太剣であり、故に咄嗟に手元に引き寄せる事も出来た。

後方に跳びすさるうとする二人の喉元へ、棍を突き出す。ピタリとその数寸手前で止めた。

首は人体における急所の一つであり、喉頭隆起を打てば呼吸困難に陥る。

二人とも、武人であるが故にそれを知っていた。己の首元に突き付けられた棍に、思わず息を呑む。

王彩は一つ息を吐き、ゆっくりと口を開いた。

「双方、手を控えてもらおうか。話し合いの場を設けたい」

「なにを？ 貴様などの指図を受ける筋合いは――」

「――手を控えろと言ったのだ、聞こえなかったか？」

多少力を込めて、女の喉元へ棍を突きつける。

先端は喉元に半分埋もれ、あと数寸突き出せば女の首はへし折れるだろう。

それと知り、女も強気な態度を崩しかける。しかし、その矜持の高さから、王彩に屈することを恥とした。

王彩の顔を鬼の如き形相で睨みつけ、大剣を強く握りしめる。少しでも気を抜けば、黒き光が空を閃き、王彩の体を両断するだろう。

不穏な空気を察したか、許？は素直に鉄球を収める。

そして笑顔で、王彩に話しかけた。

「華山さん、僕を心配して来たの？　大丈夫、僕は強いんだから！」

「まったく……呑気なもんだな、仲康。俺に負けたのは、ついこの前の話の筈なんだが」

「あ、あれは勘定外、数に入れないよ！」

溜息を吐き、やれやれと首を振る。

許？と楽しげに話す王彩に、女は苛立ちを募らせてゆく。

己はこうして喉元に棍を突きつけられ、脅しをかけられてるというのに、先程まで手を交えていた少女は、既にその喉元に棍は無い。徐々に怒りを募らせてゆく女、怒りはその表情にも現れた。

王彩はすぐに気付き、少しばかり息を吐いて棍を手元に引く。

女は瞬時に後方へ跳びすさり、その大剣を構えて獣の如き形相で王彩を睨みつけた。

場に一陣の風が吹き、緊迫した空気が流れる。それを打ち破ったのは、意外にも王彩だった。

「咄嗟の行為だ、先程のことは許してくれ。俺の名は王華山、この娘の村で世話になっている。あんたは？」

気が抜けたのか、女は一瞬間の抜けた顔をした。

しかし、すぐに顔を引き締め、普段通りの傲然とした、自身に満ち溢れた表情を取り戻す。

誰が貴様なんぞに教えるものか、内心ではそう言いたかったに違いない。しかし、名を名乗られれば、己も名を返すが道義。

この時代、漢帝国はどこよりも礼儀を重んじていた。名族である夏侯家の娘として、ここで名を返さぬのは非礼に値する。

内心の葛藤を越え、女は口を開く。

美しい黒髪を風になびかせ、桃李の如き唇から言葉が漏れた。

——曹孟徳が一の臣、夏侯元讓である。

第十一話（後書き）

最悪の事態です。頭の中で話が完結しました。
ああ、創作意欲が、やる気の全てが……………。

第十二話（前書き）

俺の頭を皆さんに見せれたら楽なのにな。

第十二話

夏侯惇、字を元讓。

その名は、王彩の脳裏に一つの記憶を呼び起こした。

洛陽で聞いた話に出た一人、現在着々と勢力を伸ばしている新興勢力、曹操軍の一将。

後世において魏を代表する武將と称せられる者である。

未だ功を立てる機会を持たぬが故に、大陸に名を轟かせるには至っていない。

が、その武才は並外れ、決して凡將に終わる器でない事は確かだ。

曹操軍最強の將は、蒼天に飛び立つ日を夢見て、主君の下で刃を研ぐ。

目の前の女がそうかと、王彩にしては珍しく人に興味を持ってじっと見る。

赤い旗袍のような装束に身を包み、豊かなみどりの髪を背に流している。釣り上った目からは、気の強さを窺わせた。

明眸皓齒、氷肌玉骨。その様を形容する言葉は数あれど、ただ一言で以て表わせる。

美人、と。王彩の見た、初めての美女が彼女だった。

しかし、その程度のことでは心動かされる程、王彩は軟弱ではない。

王勝存命の折、情欲は捨てると教えられて育った彼にとって、人の美醜など気にかけることでもない。

そも、他人に対する興味が極端に薄い王彩に、異性を意識しろという方が無理である。

背丈を越える大剣を見て、王彩は溜息を吐くが、心のどこかで納得

する。

男と女では、筋力の差が大きいのだ、と。

王彩に、許？や夏侯惇の得物を持たせても、きっと満足に振るうことは出来ない。

渾身の力を込めて、やっと持ち上げられる程度のものだろう。それを、彼女たちは軽々と扱う。それこそ、己が手足の如くに。

溜息も吐きたくなる。王彩に同情すべきであるのかもしれない。

王彩が夏侯惇を見定めている間、場には奇妙な沈黙が落ちていた。夏侯惇からしてみれば、なにをじろじろと見ているんだと憤りたいところではある。しかし、王彩の冷たい値踏みするような視線が、それを許さない。

よく見れば、その奥に子供のような光が輝いていたが、夏侯惇はそれを見抜けなかった。

許？とはいえば、その無邪気さ故に、夏侯惇の発する険悪な雰囲気を感じ取れず、王彩の視線を気にすることもなかった。

二人とも静かだなあ、などと子供のような純真さで考えては、それを深く考えることもなく、にやかな笑顔でその場に立つ。

この場で一番穏やかな心でいたのは、彼女であるかもしれない。

一通り見て満足した王彩は、ずっと夏侯惇に視線を合わせる。

苛立ちながら王彩を鋭い目で見ていた夏侯惇は、急に目が合ったことに驚き少しばかり動揺する。

しかし、それも一瞬で怒りへと変わる。

「貴様、いい加減にしろ！　いつまで黙っているつもりだ！」

「これは失礼、それでは弁論に興じるとしましょう」

急に言葉遣いが丁寧になった王彩に、少しばかりの違和感を感じる。先程はふざけたような口調であったのに、今は敬語となっている。何故か。

己の威風に打たれたのだろう、深く考えず思考を打ちとめた。この辺り、頭が弱いと言われる所以である。

王彩が敬語になった理由は、夏侯惇を武人として認めたためである。先の許？との戦いを見ているのなら、実力は分かっていたのではない。それもそうである。しかし、あの時の王彩にそれを求めるのは酷だ。

あの一瞬、己の限界を超えた速度で駆けた為に、脳内麻薬が分泌されていたのだ。思考は常の王彩に非ず、冷静さを失っていた。

「何故、貴女はこちらの少女と戦っていたのですか？」

「こやつが進軍の邪魔をするからだ。見ろ、あそこに倒れた兵たちを。皆、こやつにやられたのだぞ！」

夏侯惇の指す方を見れば、成程確かに、幾人かの兵が倒れている。腕や足を抑えて呻いているところを見れば、命までは取っていないのだろう。しかし、抵抗できぬように無力化はした。純朴そうに見えるながら、許？の抜け目なさが窺える。王彩は一つ頷き、続けて口を開く。

「仲康、何故あの兵たちを襲った？」

「あいつらが僕たちの村に向かってきたからさ！ 官軍なんて、僕らからご飯を奪っていく奴らばかりだ！ それなら、先にやつつけちゃえばいいと思ったんだ」

それもまた正しい。この時代の官軍と言えば、金で官職についた者ばかりの愚者の軍。

当然、軍紀など整っている筈も無く、民への略奪暴行など日常茶飯事である。

それを恐れて、許？は兵を打ち倒した。間違っではない。間違っではないが、先に事情を聞くべきではあった。

そう考え、王彩は短い質疑応答で答えを出す。

結局は、許？の早とちりと夏侯惇の短気が生んだすれ違いであると。

「成程、よく分かった。元讓殿、申し訳ありません。そちらの軍に略奪の意思が無い事は、この私が理解しています。そうでしょう？」

「うむ、略奪などしない。我々の軍において略奪は死罪に当たる故な、兵たちもその意思は無い」

「聞いたか、仲康。常々聞かせてやっтарう。山向こうの街の太守は英明な方だと」

「も、もしかして、お姉さんって曹操様の軍の人？」

「そうだ、先に言っただろう」

呆れたように夏侯惇が言えば、大変な事をしてしまったと慌てる許？。

王彩はそれを溜息を吐きつつ見ていたが、ふとその耳に重厚な響きを捉えた。それは馬蹄の音、大地を駆ける幾百の騎馬の轟き。王彩は、少し笑った。噂をすれば影、である。

「そら、仲康。曹孟徳のお見えだ。失礼の無いようにな」

「う、うん、わかつてる」

王彩の驚嘆すべき聴力を知っている許？は、王彩が言うのなら本当だろうとそれを信じたが、夏侯惇は違う。

何故、見えもしていないのに、曹操が来ると分かるのかと、不審の目を向ける。

それを感じた王彩は、一つ小さく笑って、向こうを見ると、東の方を指さす。

砂煙が、立ち昇っていた。騎馬の巻き上げる黄塵である。

驚きに目を見張る夏侯惇に、王彩は愉快そうな笑顔を見せた。

その笑顔は、まるで子供のようだった。時折見せる酷薄な顔をまったく感じさせない、純粋な笑顔。

騎馬の一群は、程も無く王彩たちの元へ達した。

先頭の男が、地に倒れ伏す兵たちを見て、驚きの表情を見せる。ついで、夏侯惇を見て、何故止まっているのかと尋ねた。

夏侯惇とて、好きで止まっている訳ではなく、王彩の弁で止められたに過ぎない。が、単純な性質の夏侯惇は、王彩の弁で適当に誤魔化された。

兵たちを一方的に攻撃された事など、とうに頭に無かった。

そうこうしている内に、急に騎馬軍がざわめきだした。

慌て、怯え、いさめる声さえ聞こえる。何事かと夏侯惇と許？が考えていたが、王彩は理解した。

来る、あの曹孟徳が。確かな予感があった。

騎馬の一群が横に分かれ、その道を雄大な体躯の馬が闊歩してくる。馬上に跨るは、小さな背丈の少女。しかし、その体からは、覇気が立ち昇るかのように見えた。それ程までに、彼女の存在感は並外れていた。

王彩の前まで来て、ゆっくりと口を開く。既に、この場合は、その小さな霸王に支配されていた。

「邪魔よ、退きなさい」

雷に打たれたように、王彩の全身が震えた。
傍若無人、こちらをとことんまで見下した言葉ながら、それが許されるだけの存在感が、彼女にはあった。

—— 非常の人、超世の傑。

そう評されるだけの才をもって生まれた曹操は、生まれつきの霸王だったのだろう。

他人に興味も持たない王彩が、彼女こそは人の上に立つべくして生まれた者だと思ったのだから。

王彩のそんな感情も気にせず、曹操は夏侯惇に事情を聞いていた。

話を聞いていく内に、曹操の目に目映く光が輝きだした。

ただの男、そう見ていた王彩が、夏侯惇の視認の外の速度で駆けるという。

自らが多才である故に、人の才を愛する曹操。王彩と許？を、純粹に欲しいと思った。

しかし、賊の討伐に来ているため、今はそちらを優先すべき。

感情は人材を優先しろと囁いているが、理性は討滅こそ先決だと言う。

曹操を尊敬の目で見る許？の隣で、王彩は静かに己を取り戻していた。

華山の頂きで、誰にも仕えず、ただ最強を志すと決めた。その自分が、何故曹操に圧倒されたか。

最強という妄執に囚われた王彩は、その一部だけは愚かだった。己の感情を誤魔化して、無理矢理に抑えつける。

妄執より解放されれば、曹操の配下であつたかもしれない。しかし今は、王彩の心に狂気が宿っている。

いつか、その日が来るのかもしれないが、それはきつとまだまだ先の事だろう。

曹操が王彩と許？を見て、口を開いた。

確かな自信と、己の言葉に従うことを確信したような口ぶりで。

——賊の討伐よ、ついてきなさい。

第十二話（後書き）

きつと、王彩が曹操に仕えた未来もあつたんです。

どこかの並行世界では、魏軍最強の名を轟かせていることでしょう。

今までで一番キャラが喋りました。

一人称でもないのに、ここまで鉤括弧を使わない小説も珍しいんじゃないでしょうか。

第十三話

荒涼の大地を、騎馬の一群が肅々と進む。

柔らかな春風が、兵士たちの身を包む鎧を風ぐが、兵士たちはその風に心動かすことなく、ただ眼前を見据えて、来たる賊の根城の包囲戦に心を向けていた。

行軍を指揮するのは、曹操旗下最強の将、夏侯惇。

その奥、一群の後方。静かに馬上で揺られる霸王、曹操の姿が見えた。

指揮を夏侯惇に一任し、己は目を閉じ余裕を持って、愛馬の黒鹿毛の背に跨って進む。

ここに夏侯惇の双子の妹、夏侯淵が居れば、曹操拳兵以来の将と主が揃うのだが、生憎と彼女は本拠の防衛を任せれていた。

いや、本拠の防衛こそは、最も重要視される任であるからして、それこそ夏侯淵への曹操の信頼が見えると言えるよう。

その曹操の少しばかり左後方。

この軍の中でも最も大きな体躯を誇り、燃えるように赤い毛並みが美しい汗血馬が、王彩を乗せてゆるゆると行軍速度に合わせて進んでいた。

ずば抜けて巨躯の汗血馬は、その脚の長さも他の馬とは比べ物にならない。それこそ、普通に歩いているだけで差をつけてしまう程に。しかし、それすらも理解して、暴れるでもなく悠然と歩を合わせる。この賢さこそ、稀代の名馬たる所以であるのだろうか。

馬上に跨るのは、王彩だけではなかった。

その後ろにもう一人、許？である。二人を乗せる馬が無かったために、王彩が口笛で呼んだ汗血馬に二人で乗っているのだ。

口笛一つで、数里の彼方からやって来る汗血馬を讃えるべきか、それだけの調教を施した王彩を讃えるべきか。

許？は何が楽しいのか、行軍が始まってより笑顔を絶やさず、王彩の腰にしがみ付いて鼻歌交じりに足を揺らしている。

そんな彼女を、王彩は溜息と共に背に感じていた。

自分たちがこれから向かうのは賊の根城であり、行われるのは討伐戦。

畜生に落ちたとはいえ、賊たちは元は人。そして兵士たちも人。双方がぶつかる事によって、一体どれだけの命が失われるのか。

それを思えばこそ、兵士たちも肅然とし、覚悟を決めた壮烈な面持ちとなっている。

しかしどうだろう、まるで許？はその事など考えてもいないか、現在を楽しんでいるように見える。

楽天的なのか、太平楽なのか、はたまた己以外の命を無価値と判ずる冷徹な理性からなのか。

否、許？はそれ程までに酷烈な性格ではない。かと言って、楽天的なのかと言えばそうでもない。

ならば何だと言うのか。つまり彼女は、先の事など何一つ考えない人間なのだろう。少なくともこの時はそうである。

何も考えないからこそ、何事にも左右されない冷静な対処が出来、先入観に惑わされない判断が出来るというものだ。

なまじ頭の良い人間というのは、ある程度の型に嵌ってしまい、自分の予想を越えた相手や突然の事態に混乱するきらいがある。

それこそ、全ての人間の思考を読み取り、ありとあらゆる思考を筋道立て、存在する可能性の全てを読みとったとして、たった一人の無知なる人間に打ち破れる事さえあるのだ。

何も考えないとは、即ち何にも縛られることが無いということ。

そんな人間の考えを、どう読み取れと言っただろう。

許？はそんな人間の一人である。

さりとて、考え無しの猪武者かと言えば、そうでもない。いや、王彩の意識では、少しばかりそうであると考えているかもしれないが。

閑話休題。

さて、そんな許？を後ろに乗せた王彩と言えば、これまた冷たい表情をしていた。

王彩が無表情で冷厳な目をしている時は、大抵思考に沈んでいる時である。

この時もまた、そうであつた。

——己は何故、曹操の言葉に反駁することもなく、こうして大人しく従っているのか。

幼き頃より祖父以外の人間に心開かず、何者にも従うことなく我が道を行き、時には己の障害になるからと、無慈悲に命を奪うこともあつた。

それ程までに、王彩の気位は高かつた。人に従うことを良しとしない、峻厳なる矜持。

その王彩が、何故か曹操の言葉に——どこまでも傲慢で、どこまでも尊大な彼女の言葉に、どうしようもない程の絶対性を見た。

人に従うことなど有り得ず、人に靡くことなど有り得ず、人に屈することなど有り得ず——全ての人間を従えるべくして生まれた、絶対的な王の姿を幻視させた。

霸王、それ即ち武によって天下を治める者。

成程確かに、王彩の感性はずば抜けていた。曹操に対して、一目見た瞬間に、その本質を見たのだから。

しかし、他人の本質を見るということは、つまり己の本質も相手に見られるということ。

曹操もまた、王彩の本質を垣間見ていた。

『最強』という絶対的な存在に対する圧倒的な崇拜、その裏にある畏怖。

その根幹を成す王勝、そこに端を発した狂気と盲信。崇拜と畏怖、盲信故の、偏執的なまでの妄執、執着、果ての我執。

その全てを見通すとまではいかないが、曹操は王彩の心の奥深くに潜んだ、狂おしい輝きを見た。

炎のように燃え盛り、水の如くに心を満たす、『最強』への狂信を。

だからこそ、曹操は王彩を欲しいと思ったのではないか。

あらゆる面で天賦の才に恵まれた彼女は、ありとあらゆる人間を従えさせられる、という絶対の自信があった。否、それは従えてみせるといった覚悟か。

今まで周りに居たのは、初めから己を主と崇めるような、忠実な者だけ。

血族と崇拜者では、それも当然なのだが、それでは彼女は満足しなかった。

全ての人間を従えられずして、何が王か。

この天下を治めるに、反発などあつては後世に禍根を残す。その為に、己に従わぬ者を残しておく訳にはいかない。

それが、素直に人に従わない、王彩のような人間だったら、尚更で

ある。

王彩は考える。

——何故、己は素直に従っているのか。

冷厳な双眸を曹操に向けた。

——何故、己は人に従わないのか。

無表情のままに思考する。

——何故、己は人に従いたくないのか。

——何故、己は独りでしかいられないのか。

王彩の心は、きつと、あの時から閉ざされていたのだろう。

一人孤独に、暗い森の中で震えていた、あの時から。

暗く、暗く、暗く。

闇夜を掻き分けて進むような、暗い道を歩む一生を送ろうとしていた王彩を、闇の淵から救い上げたのは王勝だった。

王勝はまるで、天に輝く太陽のようで、王彩にはなによりも眩しく、そして憧れだった。

王彩の隣には王勝が居た。それこそ、彼がここまで真つ当な人生を歩めた故に他ならない。

——しかし、その王勝も居なくなつた。

永遠を生きるかのように思えた彼も、死に抗うことは出来ず、むなしく黄泉路へ旅立った。

王彩の心は、また閉ざされた。

幼くして壊れようとしていた心を支えていたのは、紛れもなく王勝。その存在が、王彩を繋ぎ止めていた。

だが、その存在が無くなれば、どうなるか。それは自明の理である。もう、王彩の心を支える存在は無かった。

だから、王彩は支えを求めた。

このままでは己が、壊れてしまうと悟ったから。

そして見つけた、支えを。誰あろう、王勝が遺した支えを。

——『最強』たる者は、独りでなければいけないのか。

王彩は考える。

しかし、答えは出なかった。

いや、出そうと思えば、簡単に答えは出せたのだ。それでも、王彩には出せなかった。

王勝の半生も、仲間と共に駆けたものであった。それは、王彩も死に間際に聞いている。

だが、王彩はそうなれなかった。なろうと思わなかった。

人と関わることに、少なからず恐れを感じていたからだ。

なにも従うことが嫌なのではない。むしろ、王彩は人に仕えてこそ力を発揮する人間である。

しかし、彼は人に心を開きたくなかった。

それは、王勝との最後の思い出であり、己が護るべき絶対の領域で

あるから。

ずけずけと遠慮なく踏み込んでくる存在を、王彩は許容できなかった。

表面上はどれだけ飾ろうともいい。相手が勘違いして自分と友人になっただけだと思ってもいい。

——だけど、最後の扉は開かせない。

それが、王彩の護る最後の砦。心の奥深くに秘め、決して開かれることの無い鉄扉に護られた玉座。

曹操は、優れた才智を持つが故に、人の心を自然と覗けた。

それが、王彩には嫌で嫌で、なのに、その王者としての絶対性を認め、従いたいとさえ願っている。

矛盾を孕んだ心が、思考を凍りつかせて反駁を許さなかった。

それが、王彩が曹操に大人しく従った訳。

いつの間にか曹操から視線を外し、思考に沈んでいた王彩が気にかかるのか、許？はほんの少し心配そうな目を向けていた。

しかし、彼女は何も言わなかった。優しい色を瞳に浮かべて、穏やかな笑みで王彩の広い背中に身を寄せる。

その笑顔は、幼い容姿の許？に似合わず、まるで慈母が我が子を見るような柔らかな笑みだった。

少しだけ穏やかな空気が流れるそこに、一騎の騎馬が近寄った。

馬上の男は、なんとも不格好な姿で、ふらふらと背に跨っている。

馬に乗り慣れていないのか、時折尻を押さえたりと、なんとも情け

ないことである。

しかし、その姿は、この一群にあつて、先頭に行く夏侯惇よりも、馬上で余裕の笑みを見せる曹操よりも、鮮烈に映えていた。

まるで、天から降りてきたのかと思うような、輝く白銀の装束。

それは、決してこの時代に作れるような代物ではなく、装飾に凝った曹操の衣服よりも、尚目立つ物だった。

それ程までに貴重な、好事家であれば大枚をはたいて求めるようなそれを、なんとも釣り合わぬ男が纏っているのである。

確かに、顔立ちは端正だ。

整っていないながら、どこか鋭さすらも感じる。

しかし、纏う雰囲気は至って平凡。それこそ、その辺にいるような百姓と同格。許？の師である宋康の方が、ずっと衆に優れた雰囲気を纏っていた。

であるのに、何故この男が、それを纏うか。

何故なら、彼は『天の御遣い』であるから。

—— 曰く、天より遣わされた、天下を治める者。

なんとも言い難い存在である。

これから現れる英雄たちに、天下を治めるだけの力が無いと断言されたようなものだ。

それは王彩が絶対性を見た、曹操とてそうである。

彼女にも、この天下を治めることは出来ないと、そう天が言ったのと同じである。

無論、曹操の性格からして、そんなものは一笑に付すだろうが。

しかし、気に留めないとはいえ、曹操が天の御遣いを容認するとは思えない。

この天下に、皇帝は二人もいない。二頭制を取れば、それは内部対立を生む。果ては、自滅への道を歩むこととなる。

それを理解しているだろうに、何故曹操は、天の御遣いを軍中に置くか。

考えられる理由は数あれど、それは王彩になんの興味も齎さない。ならば、ここで語るのは無粋だろうか。

男が乗る馬は、この軍の騎馬兵が乗る馬よりも優れていた。評価を下すならば駿馬なのだが、生憎と汗血馬と比べては稚児のようであった。

汗血馬に怯えながら、馬上の騎手に急かされてやっと側まで寄る。

馬上の男は、王彩が纏う冷徹な雰囲気気付くことも無いのか、夏侯惇をして認めさせた王彩に興味を持った風に、笑顔で近寄った。声をかけようとして、許？がそれを手で止めた。その目は、雄弁に語る。今は、駄目だと。

だが、男は気付かないのか、首を傾げて許？に話しかける。

「君、この人の知り合いなのか？ あれ、そういえば、春蘭が二人いるとか言ってた気が……」

「……うん。僕は許仲康。お兄さんは？」

自分の意思を読み取れなかった男に、少しばかりの呆れの目を向けるが、生来心優しい許？である。

すぐにその気持ちも薄れ、男に興味を持った。

男も、少女の愛らしい笑顔に惹かれたか、笑顔で口を開く。

「俺は北郷一刀。天の御遣いとかいうやつをやってる」

「天の御遣い？ ふうん、そうなんだ」

許？の反応は薄い。

都から離れている上に、なんと言っても、許？が住んでいたのは百姓の村である。

全ての情報が届く訳でもなく、なにより宋康が迷信の類を嫌った。であるから、許？が天の御遣いを知らずとも不思議は無い。

一刀はそれを気にすることも無く、尚も王彩に興味の視線を向けていた。

「なあ、この人はどうゆう人なんだ？ えっと、仲康？」

「華山さんは、僕の村で怪我を治してるんだ。療養の為って言うてたから」

「怪我、してるのか。それなのに、春蘭より強い……うわ、どんな人だ」

己が見た中では、最も強い夏侯惇を、更に上回る実力。

己と同じくらいの背丈の王彩を、畏敬の念を込めた目で見る。一刀にとって、彼は初めて見た男の強者だった。

しかし、ここで誤解がある。

なにも王彩は、夏侯惇より強い訳ではない。むしろ、同じ条件で戦えば、確実に負ける程度の実力である。

だが、勝てないという訳でもない。王彩の力は、腕力に頼ったものではない。故に、咄嗟の機転で勝機を掴むことが出来る。

技術も速さも知恵も、王彩は夏侯惇を上回る。なにより、王彩の技巧は天下でも並ぶもの無き境地にある。

少しばかり、世の武人たちは腕力に頼りすぎるくらいがある。王彩は呂布や許？、夏侯惇と手を交えて、そう感じた。

王彩は、異端なのだ。そもそも、まだ体系の完成していない武術を、王勝が習得している方が異常なのである。

「それで、なんで話しかけちゃダメなんだ？」

「……華山さんはね、迷ってるんだ。僕も声をかけられない。これは、華山さんが自分で悩んで、自分で答えを出すものだから」

許？の穏やかな瞳は、王彩の葛藤をも見通していた。

数日ばかりの付き合い、されど彼女は王彩の本質を見通していた。

純真無垢、天真爛漫だからこそ、彼女はそれを見た。

純粹だから、他人には理解できぬ王彩の苦しみを理解できた。理解、とは言えぬかもしれない。それでも、彼女はそれを知った。

彼女は純粹である。故に感情をそのまま表現する。だから王彩も、彼女の本質を見通すことが無かった。本質もなにも、心がそのまま表に出ているのだから。

一刀には、そう言つて柔らかな笑顔で王彩の背を見る許？が、何か尊いものに見えた。

一種犯しがたい、不思議な雰囲気。それが、彼女にはあつた。

「それなら……今は止めとくよ。後でまた、話させてもらおうかな」

「うん。僕からも、お兄さんのこと、紹介してあげるよ」

「ありがとう。それじゃ」

笑顔で許？に手を振り、また騎馬の一群に混ざつて消える。

許？はそれを見送り、なんとなく晴れやかな気分で見上げた。

良い人だ、素直にそう思った。

一刀のような人が集まるのが、曹操の軍。許？は少しだけ笑顔で、曹操を見た。やはり、自分が仕えるのは曹操だと、心に強く思った。そして視線を戻し、王彩の腰に抱きつくのであつた。

第十三話（後書き）

ストック放出。

今日から三日間、午前0時に投稿を予約しておきます。

感想など、返すには少し時間が空いてしまいますが、頂けると嬉しいです

第十四話

行軍を開始してより、既に一刻ばかり。

中天に輝いていた太陽も、西に傾いていた。

張り詰めた空気の兵士たちの中にも、段々と気の緩む者が出てきている。

しかし、行軍には少しの遅滞も無い。いかに気が抜けようと、決して軍の行動に支障を起こすこと無く、それだけの調練を施された精強なる兵。

曹操軍は、まず間違いなく天下の群雄の中でも、最も精強で軍紀が整っているだろう。

更に進むこと暫し。

先を駆けた一騎が、土煙を上げて駆け戻ってきた。

曹操の下まで馳せ、その前で馬を転げるように飛び下り、膝をついて包拳の礼を取る。

「お伝えします！ これより二里程先、賊の根城を確認いたしました！」

「御苦労。数は？」

「砦に籠っており、その数は確認できませんでした」

ふむ、と一言呟き沈思する。

顔を上げ、己の前に跪く兵に労いの言葉をかけ、一人の少女を呼ぶ。

すぐさま返事をし、曹操の側に控えていた騎馬が近寄る。馬上に跨るは、これまた小さな背丈の少女。

曹操と変わらぬ程の背丈、どこか淑やかに見えて、しかし気の強さも窺える顔立ち。

つい先日、曹操が軍師に迎えた、荀子を先祖に持つという名家の子女。

荀？、字を文若という。

「桂花、策を出しなさい」

主君の言葉に、己が試されていると悟る。

この曹操軍において、才無き者は栄達出来ない。才を愛するが故に、愚を疎む曹操の苛烈な性格故である。

荀？は考える。

情報もほとんど無い状況で、どう策を立てればいいのか。なれば、その意図はなにか。

勿論、決まっている。己の才覚を、ここで試す気なのだ。

破綻の無い策謀、緻密な計算の上に成り立つ戦略、咄嗟の機転で軍を動かせる戦術。

なにをもつて軍師を務めるか。無論、全てを備えていれば、完璧である。しかし、この世に完璧など無い。

自信はある。

己の才は人に優れる。一通りのことは、そこらの凡人よりも遥かに出来る。しかし、自分が属するのは、綺羅、星の如くに集まる曹操軍。

どうしても、不得意な面が見えてしまう。

荀？は、内政面に大きな才を与えられて生まれた。無論、知謀も世に抜きん出ている。

しかし、戦術だけは、どうにも秀才の域を超えられなかった。咄嗟の機転を利かせることも出来るが、それでも世の才人と比べれば、どうしても見劣りする。

ならば、どうすればいいか。

——戦術でどうにか出来るような段階に至らせず、逃げ道を全てを塞いでやればいい。

血迷った突撃さえも許さず、徹底的に、軍勢を壊滅に至らしめる。外から削り、内から抉り、戦闘になる前に全てを決す。

それこそ、荀？の考える最高の勝利。

戦わずして勝つ。

どこまでも理想論で、現実にかかることは稀。

しかし、己の才を以てすれば、不可能なことではない。

そう自負するからこそ、こうして今、彼女は曹操軍の軍師となっている。

荀？は少し俯き、思考を広げる。

頭の中には、糧秣の監査官を担当していた時の、ありとあらゆる情報走る。

そして、軍師となつてから、与えられた情報。今回の討伐に際し集められた兵数と糧食、騎馬数。

将の能力、そして率いられた兵の士気の高さ。

常人では混乱し発狂しそうな程の、とてつもない量の情報が駆け巡る。

そして、点在する点は、一本の線となり、荀？の頭に一つの策が完成した。
思考し想定するも、破綻は無い。最善の策だと、確信して顔を上げる。

この間、僅か数秒。恐るべき情報処理能力と、構成力である。

そんな荀？をじっと見ていた曹操は、少し笑顔を見せた。

やはり、素晴らしい人材。召し抱えたのは、間違いでは無かった、と。

「一つ、考えました。お聞き入れくださいますか」

「当然よ。伝令、地理を説明なさい」

先程の兵が走り寄り、二人に砦の周囲の地理を、事細かに説明する。荀？はそれを聞き、考え付いた策と照らし合わせ、少しの修正を加える。

曹操が、聞く。荀？が、応えた。

「賊の砦は、周りが崖となっています。そのため、万一にも奇襲は無いだろうと、油断しているでしょう。私達は、その油断を突きます」

「ふむ。具体的には？」

「はい。従軍している将は、元讓殿お一人。その率いる騎馬兵は五百。これを、二手に分けます」

戦で最も力を発揮する騎馬兵を、わざわざ二手に分けて数を減らす。それは、凡人では絶対に思いつかぬ策。否、思いついたとて、それを実行しようなどとは思わない。

先を考えればこそその策だが、凡人では目先の事に囚われそれが考えられない。

曹操は、無表情で先を促す。

「元讓殿率いる一隊を、左方に。もう一隊を、右方に置きます」

「伏兵ね。しかし、後方は？」

「これ以上兵を分断しては、意味がありません。それに、後方は崖。逃げるにしても、快速とはいかないでしょう。そこを、矢で射るのみです」

「成程、確かに良い策だね。ただ、その策で行くと、この私を餌に、賊共を釣る気ね？」

曹操の目が、一瞬強烈な光を放った。

それは人の心を見透かす瞳。それに睨まれば、心弱き者は、恐れて膝を屈する。

荀？も、一度震えたが、何事も無いかのように先を説明する。

それに、曹操は薄く笑って満足げな表情を見せる。

この程度で怯え、満足に策を出せないようでは、軍師など務まらない。

曹操一流の、人材選定術である。

「それをお気になさる程、孟徳様は狭量では無いと私は考えますが……」

「ふふつ、冗談よ。続きを」

「はい。孟徳様は、皆正面に展開、賊共の視線を集めます。十分に挑発したところで、銅鑼を鳴らして攻撃を匂わせ、関の声を上げさせます。敵が出てきたところで、後方に下がり、十二分に引きつけましたら、騎馬隊に側面を襲わせます」

つまりは、曹操を囫に、夏侯惇を伏兵として配置。

釣られた敵を、騎馬で叩く。単純だが、相手は烏合の衆。この程度の策でも、見事に引つ掛かって混乱に陥る事だろう。

荀？の力量と才覚を見るための、曹操の計らいであるが、これでは少しばかり彼女には役不足か。

「なかなかの策ね。ただ、それでは、多少なりとも被害は出てしまうわ。私は、兵の犠牲を零にしろと言ったの」

「無論、考えております。騎馬隊には、一寸たりとも止まることなく、敵の側面に突撃して頂きます。真っ直ぐ駆け抜け、また反転して突撃。それを繰り返せば、賊は反撃の術なく壊滅するでしょう」

「賊が騎馬隊に武器を向けるとは、考えないのかしら？」

曹操が言いたいののは、槍衾であろうか。

この時代に槍衾の概念があつたかは定かでは無いが、それと同意義の事を、曹操は指摘しているのである。

しかし、荀？とて、それを考えない訳ではない。

当然のことながら、対策も考えてある。

「その為に、孟徳様の本隊には、矢を用意して頂きます」

「あら、あまり多くは持つてきていないのだけど」

「それ程多くはいりません。ただ、賊を混乱させる程度の効果があれば十分です。……以上が、私の策です」

曹操は考える。

成程、破綻は無い。しかし、少し綿密に過ぎるのではないだろうか。緻密に固められた策は、打ち破られれば余りに脆い。想定外の事態にも、咄嗟の対処が出来ない恐れがある。

ここに、荀？の性格が出ているようだ、曹操は思った。

しかし、それを補って余りある戦略性。彼女は内政や戦略にこそ、力を発揮する人間なのだと気付いた。

曹操は一人納得し、荀？を褒める。

己に向けられる崇拜の目も気にならないか、曹操は幾人かを呼び寄せた。

夏侯惇、許？、一刀、そして王彩である。

曹操に陶醉しきった目を向けていた荀？が、一刀と王彩の姿を認めた瞬間、その眼は一気に蔑みの色へ変わった。

王彩は他人の視線など微塵も気にしないが、一刀は少しばかりたじろいだ。

ずっとそうだ、彼女は己を目の敵のように嫌い蔑んでくる。自分が何かしたかと考えるも、心当たりなどある筈もない。なんといつても、初対面の時からそうなのだ。首を捻りながら、曹操の側に近寄る。

「華琳、どうしたんだ？」

「今回の策を、説明しておこうと思ったのよ」

一刀が曹操を真名で呼ぶと、苟？の目に炎が宿った。憤怒、嫌悪、軽蔑、あらゆる負の感情が燃え盛る。その視線を受けて、まったく気にしない程に剛胆でもない一刀は、少し冷や汗を流した。

夏侯惇は、曹操に問う。

「華琳様、策など必要なのですか？ 所詮、相手は賊、烏合の衆に過ぎません。突撃だけで、十分ではないですか」

「それでは兵に無駄な被害が出てしまうわ、春蘭。此度の戦は、最小限の被害で最大の戦果を上げる事が目的よ」

「そ、それはそうですが……」

夏侯惇としては、何故賊相手に策を巡らすのかが分からない。

烏合の衆に過ぎない賊共など、真つ向から叩き潰してこそ、勝利を飾れるのだと、そう考えるのだ。

深く考えることをしない夏侯惇であるから、突撃こそ最高の策だと信じて疑わない。

ここに妹、夏侯淵がいれば、ある程度彼女にも分かりやすいように説明するのだが、残念なことに、今はいなかった。

夏侯惇は、納得しないまま曹操の言葉だからと従う。

「春蘭、貴女は配下の騎馬隊を二手に分けて、砦の右方、左方に伏せなさい」

「し、しかし華琳様……」

「——春蘭、私の言う事が聞けないの？」

「は、はっ……」

鋭く睨まれ、夏侯惇の意気は弱まる。

さしもの夏侯惇も、主君には口答えも出来ない。仕方ないと言えば、仕方ないが。

曹操はそんな夏侯惇を気にすることなく、次々に指示を飛ばす。周りにいた兵に、策を大まかに説明し、矢を用意させるようにと伝える。

曹操は夏侯惇を走らせ、騎馬隊を分けるよう指示する。

続いて、王彩と許？である。二人をどうするか。

荀？の視線は厳しく、目で人が殺せるのなら、王彩が死んだ回数は百に至るのではないか。

そんな視線を受けても尚、王彩は無表情を貫き通す。気にするところは一寸たりともない。

しかし、許？はそうはいかない。王彩に蔑みの視線を向けられて、荀？に好印象を抱けるか。否である。

許？の中で、荀？の評価は下がる一方であつた。

「そういえば、自己紹介もしてなかったわね。私は曹孟徳、陳留郡の刺史をしてるわ」

「……旅の武芸者、王華山です」

「許仲康です！ よろしくお願いします！」

王彩は未だ思考に沈んでいるのか、返答が遅い。

荀？はそれを睨みつけるも、王彩の目を見てしまった。色の無い、まるで死人のような光の失われた瞳を。

びくりと震えて、慌てて王彩から視線を外す。

人間に生理的な恐怖を覚えさせる、王彩の冷たい瞳。

それを見た人間は、往々にして生きてはいない。すぐ後に、王彩の棍が飛んでくる故。

しかし、この場でそれは無かった。なんと言っても、相手は曹操軍の人間。

王彩も、新進気鋭の勢力に手を出すほど、愚かでは無い。

「さて、貴方達は本隊に加わって、私の護衛についてもらうわ」

「ちょ、ちょっと待ってください！ こんな、氏素性の知れない者

「たちを、護衛に？ いけません！」

「私の決めたことに、不服があるの？」

「……で、ですが」

「それに、貴方達は私に手を出すほど、愚かではないわよね？」

薄い笑みを、王彩と許？に向ける。

許？は緊張したように背筋を伸ばしたが、王彩はそれを見ても、何一つ表情を動かすことはなかった。

まるで彫像のように、氷の仮面を外すことなく。

曹操は満足そうに笑い、荀？を振り返る。

これでも、不服かと。荀？は、答えなかった。

——前方から、夏侯惇の声が響いた。

「華琳様！ 砦が見えました！」

一つ頷き、曹操は馬上で『霸王』となった。

先程までの少女では無く、圧倒的な威厳を見せる、王者。

まるで身体から覇気が立ち昇るように、この場は一気に彼女に支配された。

兵士たちが震える。しかし、その震えは恐れからではない。

己の主君の、他者を心服させる魅力、逆らうことなど許さない絶対

性。

全てが、王者のそれであつた。故に彼らは、曹操を崇拜した。自分たちを導いてくれる王、時代を支配する寵児。彼らは皆、兵としての命は全て、曹操に捧げていた。

陶醉しきつた目を向ける兵士たちに、曹操は馬上で眼前を見据えるだけ。

しかし、それだけでも兵士たちは、崇拜の念を強める。そこに居るだけで、人の信望を集める。

それが、『霸王』曹操だつた。

「春蘭！ 先行して、策通りに伏せなさい」

「はっ！」

夏侯惇が騎馬隊を率いて、砦の方へ駆ける。

途中で一群は二手に分かれ、右方と左方へ馳せた。

舞い上がる黄塵が消える暇も無く、曹操の指示は飛ぶ。

「全軍！ これより我らは、砦正面に展開する。しかし、直接の戦闘は行わない。我らは、罠だ。賊共を釣るための、餌だ。皆、存分に挑発し、賊共の怒りを誘え」

おう、と。

大地を震わすような声が、兵士たちから発せられる。

熱気が高まる。兵士たちの顔は、緊張から引き締まった。しかし、

そこに死への恐れは無い。

兵士たちの心を支えるのは、曹操への圧倒的な崇拜。まるで、それは宗教の如くに。一人の人間を崇める、一種の一神教のよう。

王彩と許？は、曹操の後方に控えている。

その眼には、曹操への崇敬の念が込められた兵士たちの顔が映っていた。

王彩は変わらず無表情であるが、許？はそれに感銘を受けた。末端の一兵士でも、曹操に対する忠義があることに、驚きさえ覚える。

その曹操は、馬上で手を挙げた。

静かに、しかし厳かな声を響かせる。

——全軍、進め。目標は敵砦だ。

第十四話（後書き）

文若さんが軍師に見えない。

なので、うちの文若さんは戦略、及び内政家です。

あと、読めない漢字があれば、遠慮なく言ってください。
ちゃんとルビ、振りますので。

第十五話

三方を崖に囲まれた、近隣一帯を荒らす盗賊の根城。
その砦の前に、一軍の姿が見えた。

その数およそ千。一糸乱れぬ足取りで陣を張り、鎧の擦れる音と足音だけが場には響く。

翻るは赤地に黒の染め抜き、『曹』の牙門旗。

——霸王、曹操である。

曹操は、陣の中央で砦を見据える。

賊たちは危機感も無いのか、沈黙を守り砦から出て来ない。

斥候からの情報で、敵兵数はおよそ三千と判明した。曹操軍の倍である。

だが、恐れは無い。恐れなどあつてなるものか。

敵は烏合の衆。そして、人の道を外れた獣。

如何に倍の兵数を誇ろうと、精強なる曹操軍に敵うべくも無い。

彼女の内に、熱く燃えたぎるは絶対の自信。

己こそが天下を統べるのだと。ならば、このような所で躓いていられるか。

否だ。我が覇道を遮るのならば、それが何であれ蹴散らすのみ。

自然、曹操の心の動きに、覇気が漏れる。

同時に、彼女の前に兵がまろび出た。完了した、との伏兵部隊からの伝令である。

一つ頷き、彼女は振り返る。後ろに控えるは、護衛の任を負った許？、そして王彩。

王彩の目に、未だ光は無い。

許？はそれを心配そうに見るものの、王彩はそれに気付く様子も無い。

果たして、周りの状況が見えているのか、いないのか。

彼の表情から、それは判断できない。

荀？はといえば、曹操の横に控えて馬に跨る。

少し王彩に苦手意識を持ったのか、曹操の視線を追って彼を見た途端、勢いよく首を反転させた。

何故、曹操は王彩の眸を見て、何も感じないのか。

彼女は不思議に思う。

何の事はない、曹操には王彩の心が覗けていたからだ。

表面上は荀？が見た通り、まるで死人である。しかし、その心は麻の如くに乱れ、この場の誰よりも人間らしい。

悩み、迷い、苦しみ、惑い。苦慮と葛藤の末にこそ、真実はある。

即断即決大いに結構。しかし、熟慮してこそ、だ。

故に、曹操は王彩を恐れない。

人として生きる者として、王として生きる者として。

例えそれが、死人であろうと従えてみせよう。それが王者というものだ。

「二人とも、頼んだわよ。万が一にも、賊がここまで来ることは無いでしょうけどね」

「は、はいっ！」

「……諾」

許？の元気な返事と対称に、王彩の返事はただ一言。

しかし、曹操は気にした風も無く、一つ頷き前方を見据える。
その眼に映るは、賊の砦のみならず。

果てまで伸びる、霸道。己が歩むべき、天下への道。

どこまで行く？

——天の果てまで。

何故進む？

——我が天命故。

いつまで、歩む？

——無論、死ぬまで。

『霸王』とは、恐れぬ者。

この道の先に何があるかと、彼女は恐れない。恐れなど、とうに無い。

その胸に燃えるのは、未来への希望と野心、そして大望。

因果律を間違えるな。順序が逆だ。

過程があつて、結果が出るのではない。

結果が既に決まっているからこそ、過程がついて来るのだ。

天下を取るから、霸王になるのではない。

霸王だから、天下を取るのだ。

『霸王』は、馬上で指示を出す。

銅鑼を鳴らせ、と。開戦の合図を、盛大に打ち鳴らせ。

太陽の照らす大地に、鳴り響くは銅鑼の音。

無粋なるかな、されどまた風雅。

趣など無い。しかしどこまでも熱く、燃え滾るように。

天まで響けと、打ち鳴らされる銅鑼の音。

これは開戦の合図、しかし曹操軍は打って出ない。相手が出るのを待つ、これは合図に過ぎない。

戦の礼儀、それがこの銅鑼。

これを鳴り響かせるは、攻撃の合図。敵方は、迎え撃つために出陣する。

それが、礼儀。

——しかし、所詮獣に過ぎない盗賊どもが、礼儀を弁えているか。

答えは、否。

砦の扉が、開いた。

曹操軍が陣を敷くのにも反応せず、ひたすらに沈黙と静寂を守っていた砦が、だ。

開いた砦から、硬く箆っていた賊たちが走り出る。

手に手に罅の入った貧相な武器を振り上げ、獣のように血走った眼光で曹操軍へ迫る。

敵兵数はおよそ三千。斥候の情報に誤りは無い。

しかし、砦の守備を捨てて、全兵力を迎撃に充てる無能がいるか。多少なりとも軍学を学んだ者なら、その愚に気付く。だがやはり、

賊は賊に過ぎなかった。

無学無才、そして無気力。故に畜生へと落ちたのだから。

盛大に打ち鳴らされるは、曹操軍の銅鑼。

大地に響く喚声は、盜賊の雄叫び。

勇ましかろう、されど脆い。

脆さは弱さ。必然、打ち破られるのみ。

愚にもつかぬ賊の出陣に、曹操は冷徹な眼でそれを見つめた。

それすらも予想していたか、微塵も動じない。面に上るは、賊への嘲笑。

荀？は、自分の完璧と思われた策を、敵の礼儀知らずで破られ、その表情を驚愕に染める。

成程、彼女は頭が良い。しかし、頭が良い人間に多いが、自分より劣る人間の思考を理解していない。

それは時に、軽侮と慢心となって現れ、身の破滅を呼ぶ。

上も下も広く理解し、許容してこそ真の智者。

彼女の性格では、少し難しいかもしれないが。

「孟徳様！ 想定外でした、早くお下がってください！」

「——想定外？ 違うわね。全て、我が手の上よ」

曹操は馬上で手を上げる。

その顔は、まるで全てを見通していたように、薄い微笑を湛えて。率いる兵の視線を一身に集め、彼女は静かに口を開く。

「恐れるな、決して。賊がここまで辿り着くことは無い。引きつけろ、じつと。合図を出すまで、静かに」

一斉に、足を揃えた。矢を番える。

ざっ、という音が響いた。しかし、賊には聞こえない。

いや、聞こえたとしても、賊共は歯牙にもかけなかったに違いない。彼我の兵力差は、倍。何故、倍の兵力差がありながら、敵を恐れなければいけないのか。

賊共に、思慮など無かった。

策を警戒することとせず、砦を守ることとせず。ただ、目の前の敵を打ち倒すことのみに、意識は向かう。愚行は、敗北に直結する。

——— なんと無様。なんと滑稽。

曹操は、冷たい目で、それをじっと見る。

まだだ、まだ早い。もっと、もっと引きつける。

静かに、静かに、静かに。時を待て、後暫し。

夏侯惇は気が短い。

しかし、まだ待っている。そうだ、それでいい。

彼女は頷く。後少しの辛抱だと、心で呟きながら。

——— そして、合図の時。

「全軍、放て!!」

号令一下、数多の矢が天を翔ける。

それは弧を描くように、大地を駆ける賊たちの下へ。吸い込まれるように、突き刺さる。

上がる悲鳴、そして怒りの叫び。

それでも尚、賊共の頭に撤退の意思は無い。

仲間の屍を踏み越え、敵軍に喰らいつかんと、雄叫びと共に駆ける。

——しかし、現実是非情。

左右から轟く馬蹄の音に、驚愕と、ほんの少しの恐怖を感じて振り返る。

目に飛び込んできたのは、幾百もの騎馬。馬上に閃くは、槍鋒の光。停滞した思考にも、絶望が染み込んでくる。

それはまるで、逃れられない泥沼のように。足を止め、一瞬の思考の停止。

我に返った者は、直ぐに状況を把握する。

どちらかを破り、逃げるしかない。そう判断した。

左方よりの騎馬隊は、先頭を女が駆けている。

ならば、そちらが与しやすい。そう思い、賊は左を向く。

だがそれは、してはいけない勘違い。

黒髪を風に靡かせ、彼女は吼える。殺、ただその意思で。

咆哮、轟音、視界、馬蹄、死——。

騎馬の蹄は、無情にも賊共を踏み潰し、駆け去る。交差して駆け抜けた騎馬隊は、一気に離れて、反転。もう一度、来る。

とうとう、恐怖に負けた。

恐慌状態に陥り、それぞれが悲鳴を上げて皆へ逃げ帰ろうと走る。だが、それを見逃す程、曹操は慈悲深くはない。

手を挙げ、振り下ろす。

それは号令、無慈悲なる死の雨の合図。

矢が放たれる。放物線を描き、背を向け逃げる賊共の下へ。

——不意に、今まで沈黙を守っていた王彩が、動いた。

汗血馬を走らせ、曹操の横を駆け抜ける。

突然のことに、曹操は勿論、許？さえも反応できなかった。

「止まりなさい、王華山！」

「華山さん、待って！」

二人の声がかかるも、王彩は気に留めた風も無い。

それどころか、聞こえてすらいらないのかもしれない。

今の王彩ならば、有り得る事だ。

汗血馬の健脚で、一瞬の内に本陣は遠く離れる。

風のように駆け、天を翔ける矢すらも越えて、賊共に迫る。

しかし、賊たちはそれにも気付かない。今は、ただ、逃げたいという意思のみで身体が動いている。他のことなど、耳にすら入らなかった。

最後尾を行く賊の背に迫り、棍を一閃。

轟と空を裂き、頭蓋を砕いた。がくがくと奇妙な動きを見せて、賊は倒れる。暫く痙攣していたが、やがて止まった。

王彩は、それに意識を向ける事こともせず、次の賊へ迫る。

一閃、二閃、まとめて数人を殺す。その眼に感情は無く、ただ機械的に、無慈悲に。

追い抜いた矢が、降り注いだ。

王彩は振り向くことすらしない。既に矢など意識に無いのか、だとしたら余りに愚行。

数本の矢が王彩の背に迫る。王彩は振り向かない。刺さる。曹操が思った。

――刹那、王彩は頭上で棍を回した。

巻き起こる風、それは矢をも振り払う。

初めから考えていたのだ。無意識に見えて、意識。彼が考えなく動くことなど、有り得ないことか。

ついで襲いかかるのは、左右より迫る騎馬隊。

先頭の夏侯惇が、何事か叫んでいる。

しかし、王彩の耳にそれは届かない。

衝突すると思われた瞬間、汗血馬が一気に駆けた。

俊足で以て、騎馬の一群をやり過ぐす。全て、王彩の計算の内。

残る賊は、三人。

王彩の眼は、獣の如き光を発し、身体からは獣気が漏れる。殺、頭にあるのはただ一字。狂気、ではない。既に彼の意識は、獣と化している。

狂気が入る余地など、一寸も無い。

汗血馬は駆ける。先を走る賊の下に。

王彩が指示するまでもなく、自然と走る。人馬一体とは、まさにこの事か。

王彩は、それを当然のように、棍を振る。

一閃、首を薙いだ。反転、顔が真後ろを向く。倒れるのを見ず、王彩は次の賊を見据える。

汗血馬が駆け、王彩が一突き。

小さく破裂音が響き、賊は倒れる。それは内臓が割れた音か。残るは、一人。

既に賊も、気付いていた。

残っているのは、己だけだと。王彩からは、逃げられないと。それでも、走る。逃げられないなんて、逃げない理由にならない。逃げられなくても、逃げる。

少しでも、命を繋ぐために。この世界に、生きているために。

――視界が、歪んだ。

不思議に思う自分と、死んだのだと納得した自分。

二つの思考が重なり、消えた。

賊の頭蓋から、めり込んだ棍を引き抜き、王彩は馬上で天を仰ぐ。

まるで、自分が自分でなくなったようだ。そう、茫漠とした頭で思った。

しかし、だからこそ思考が晴れた。

先程までの悩みが、何か下らないことのように思えて、笑いたくな

ただ、笑えなかった。

何故、己は人に従わないのか。

——従わなくとも、なんの問題があろうか。

何故、己は人に従いたくないのか。

——従いたくなければ、それでいいではないか。

何故、己は独りでしかいられないのか。

——孤独こそ、『最強』への最短経路だからだ。

頂きを登るに、狭き道を二人で進むなど有り得ない。

頂点に至るは、ただ一人。ならば、独りでいて何がおかしいか。

そうだ、何を自分は迷っていたのだ。

簡単なことだ。こんなにも、あっさりと答えが出たのだから。

王彩は天を振り仰ぐ。

その表情に、死人の影は無い。ただ、迷いが晴れたことの解放感のみ。

清々しい気持ちで、表情を彩っていた。

曹操と許？が、王彩に駆け寄る。

軍令を違えたことを、曹操は責めた。
己を心配させたことを、許？は責めた。

しかし、王彩に届いた様子は無い。

それにも慣れたのか、曹操は一つ溜息を吐き、王彩に話しかけた。

「華山、今回のことは責めないわ。貴方を縛ることなど、出来ないものね」

王彩は反応しない。

その眼は天を見つめ、曹操など眼中にない。

そのことに、いつの間にか近づいていた夏侯惇が怒りの叫びを上げかけるが、曹操が手で抑える。

「単刀直入に言うわ。——私に仕えなさい、王華山」

ぴくりと、王彩が反応した。

仕える、その一言に。

天を見ていた眼が、曹操を捉える。先刻までの光の無い眼でなく、爛々とした輝きを湛える瞳。

「貴方は、我が下でこそ輝く。ならば、選ぶ道は一つでしょう？」

「……あんたに、仕える？ 俺が？」

「貴様、華琳様になんという口のきき方だっ!!」

「——春蘭、黙りなさい」

常の飄々とした敬語はどこに行ったのか、王彩は奔放な言葉で答える。

それに怒り狂った夏侯惇が掴みかかるうとするが、曹操が止める。なんとと言っても、王彩が素を見せた。その事が、どれだけ貴重か、曹操には分かっていた。

王彩は、曹操をじつと見て、答える、

「……無理だな。俺は、あんたには仕えられない」

「何故？」

「俺は、俺だ。ただ独りで、最強の道を邁進する愚者だ。俺の隣に、先に、まして上に、人はいない」

それが、王彩の答え。

仕えられないと、孤独でいたいと、そう言う。狂ってはいない、されど思考は道を外れた。

もう、彼は壊れかけていた。

「——私は、天下を取るわ。霸王となって、この天下を取る。なら、私の戦いの数々で、その武を振るえば、自然最強となっているんじ

やないかしら？」

「違うな。それは最強じゃない。最強とは、人に与えられるものじゃない。己で掴み取るものだ。あんたに付き従って、全ての戦いで勝利して、それで最強？——下らない、下らないよ曹孟徳」

「……下らないとは、言ったものね。では、貴方が求める最強とは、一体何？」

「——最強とは、そのままの意味だ。誰にも勝てぬ者。誰にも勝った者。そこに、価値観の別など存在しない。最も強い奴が、最強さ」

まるで陶醉したように、王彩は答える。

曹操との問答、それは王彩の考えの全てを晒していく。
許？に、苟？に、夏侯惇に。誰にも漏らすこと無く、静かに内に溜めていたものを、全て零していた。

「……私は、霸王よ。欲しいモノは、全て手に入れる。それが、人でも」

「霸道王道、大いに結構。そら、捕えたくばやってみろ。——それでも俺は、最強の道を進む。誰にも、邪魔などさせない。絶対にだ」

沈黙。

曹操が、口から言葉を発するのを止めた。

王彩のどこまでも不敵な言葉に、何か抗いがたい威厳を感じた。
何故、自分が。考えても、答えは出ない。

許？は思う。これが、自分の知っている王彩かと。

まるで違う。彼が、ここまで感情を発露するところなど、終ぞ自分には見せなかった。

それが、少しだけ寂しく、また悲しかった。

「どうした。俺を、捕えるんだろう？ …… やらないんなら、俺は行くよ。ここでお別れだ。あんたと道を交えることは、もう無い」

「…… そうね。貴方とこうして出会い、言葉を交わしたのは、何か不思議な偶然だったに過ぎないのかもしれない」

「もとより俺たちの道は、違っていったんだ。初めから、ずっと。それが、仲康という存在で、たまたま交わった。それだけの事だ」

許？がいなければ、王彩はここにいなかった。

あの村に許？がいなければ、王彩は負傷することがなかった。そして、陳留の庁へ行き、彼女の知らぬ内に武人と戦っていただけ。

それを、許？が二人の道を交えた。

感謝はしない。たまたま起きただけの、偶然なのだから。

「天下なんて、俺の知ったことじゃない。だけど、あんたは、凄い奴だと思っただよ。あんたなら、取れるかもな、天下」

「言うわね。私が天下を取るのには、必然よ。取るべくして取る。それだけ」

「はつ。なら俺も、最強になるのは必然ってか」

愉快そうに笑い、王彩は馬上で身を正した。

会うはずの無かった霸王へ、いずれ天下を取る英傑へ、最後の別れを。

曹操も、馬上で背を伸ばす。

会うわけも無かった武人へ、いずれ最強へ至る俊傑へ、最期の別れを。

既に二人の視界に、他の人間は映っていない。

王彩を悲しげな眼で見る許？も、王彩に圧倒されていることに苛立ち強く睨みつける荀？も、武人として王彩の威に打たれた夏侯惇も、二人には見えていなかった。

「二度と会うことは無いが、あんたが天下を取るのを楽しみにしてるよ」

「どこかで野垂れ死なないことね。この曹孟徳に、ここまで大口を叩いたのだから」

二人はもう一度、視線を合わせて、笑った。

——じゃあな、曹孟徳。

——さようなら、王華山。

第十五話（後書き）

曹操編、これにて終局。

始めて七話、まるで彼女が主人公のようでした。

いつか、彼女を主軸にした作品を書いてみたいですね。

第十六話（前書き）

二人の口調が合ってるか、心配です。

病院ではやり直して確認という訳にもいかないので、間違ってたらごめんなさい。

第十六話

曹操と別れてより、早幾日。

宛の無い旅故に、急がねばならない理由もない。

一日に千里を行くと言われる汗血馬を、急がせることもせず、ただゆっくりと、その歩くに任せる。

馬上で王彩は、天を仰いで流れる雲をじつと見ていた。

意味は無い。そも、王彩にとって流れゆく時間に意味など無い。

彼の人生が色づくのは、鬭争の刹那。振るわれる剣槍と、矢が乱れ飛ぶ戦火の只中で始めて、彼という存在は意味を持つ。

それ以外の時など、彼にとっては、生きているとも言えない、無駄な時間に過ぎない。

無駄なことに力を尽くす人間など、極少数。

王彩は、大多数の一部だった。

いや、鬭争以外に尽くす力を持たない彼は、その大多数の中でさえ異端。

命のやり取りと、奪い合いの一瞬でしか、彼は自ら動かない。

どこまでも、無駄なことを嫌う彼だからこそ、である。

汗血馬の背に揺られて、彼は今日も茫漠の大地に行く。

手に棍を弄び、足を所在無さに揺らす。向かう先すら見ず、考えず、ただ愛馬の足が向くままに。

雲は流れ、流れ、流れては消えていく。時にくつつき、時に散り散りに分かれ、様々な動きを見せる白雲を、ただ見つめて。

そうして、また一日が終わるのかと思われたが、この日はそうならなかった。

——前方より、喚声。

王彩が馬上で身を起こす。手に持った棍を強く握った。驚異的な視力で、遙か彼方を見る。その眼が認めたのは、激突する二つの軍勢だった。

すわ戦かと、汗血馬にしっかりと跨る。汗血馬も、その意思を悟り、駆け出した。

汗血馬を駆り、馬上で一度棍を振る。

いつでも飛び出せるよう、体勢を整えた。

——戦こそ我が生の華、鮮やかに狂い咲いて魅せようか。

一日千里を駆ける名馬、その速さは風を越える。

蹴り上げた足は黄塵を巻き上げ、風を巻き起こして進む。

最早、進む、などという生温いものでもない。それは既に、移動の範疇に無い速度。

誰が、瞬きの内に、目の前に騎影が現れると想像するだろうか。

誰にも予想できない。想像も予測も推測も、彼らの頭には初めから無かったのだ。

突然に現れた騎馬に、呆然とするばかりの両軍。

それを見て王彩は、顔を歪めて笑みを浮かべ、棍を宙で回した。ついで、大喝一声。

巻き起こる風は彼らの顔を、王彩の一喝は耳を打った。意識を取り戻す。

皆の眼が、王彩を認めた。歪んだ笑顔を、双眸でしっかりと認識する。

誰かが、声を上げようとした。誰何の声を。

しかし、王彩は既に駆け去っていた。彼らを一瞥しただけで、実力者を求めて次の一群へ。

彼らの傍らを赤き流星が駆け抜け、慌てて振り返る。

その視界に、既に騎影は無かった。

衝突する軍勢の只中を、単騎で駆け抜ける王彩。

その眼は、右へ左へ忙しく動く。一人たりとも見逃さない。実力者を見つけ、手合わせを願う。それだけを考えて。

しかし、この状況でまともな手合わせが出来るのか。

王彩は武芸者である。武術を修めた、武術家である。

彼が今まで手を交えてきたのは、武人。戦と殺し合いの中で磨かれた技量を誇る。その本質は、将。直感と膂力に頼った、荒削りな実力。

王彩と彼女らでは、そもそも根本が違った。

王彩が比重を置くのは、技術。

彼女らが比重を置くのは、膂力。

無双の剛力には、小手先の技術すら通用しない。成程確かに、その通りである。

しかし、だ。

小手先の技術では敵うべくもなくとも、一心に研鑽された技の結晶だったら？

武術が生まれてより数千年。先人たちの血と汗の結晶、それが今に受け継がれている武術である。

腕力で及ばぬ敵に、速さで勝る敵に、盲いた者が、四肢の欠けた者が、どんな状況でも、どんな条件でも勝てる、そんな力を。

ただ一心に、数千年の時を懸け、中国武術は進化し続けてきた。殺

人術を、ひたすら極限まで高め続けてきた。

その結晶は、王彩に受け継がれている。余すところなく、王勝が全てを伝えた。

生来膂力に恵まれなかった彼を、世の豪傑に遅れを取らないだけの超一流の使い手へと育て上げた。

その彼にとって、本来無双の剛力など、意味を為さない筈なのだ。

だが彼は、未だ完全に武の全てを習得してはいなかった。

伝えられた武は、言うなれば数千年の歴史。積み重ねられた、武の真髓。

それを弱冠二十歳の王彩が、全て修める、という訳にもいかないだろう。

当然のことである。

話を戻そう。

この状況で、まともな手合わせが出来るのか、という事だ。

王彩が今まで手を交えた相手とは、余人を交えず一対一で戦ってきた。

それが、周りに何百何千と兵が居る、矢が飛び交う戦場で、同じように戦えるのか。答えは、可だ。

あらゆる状況、あらゆる条件で、勝利を掴むために。鍛え上げられた武術は、王彩の中で静かに脈打っている。

戦場を駆ける王彩の眸は、爛々と輝いていた。

黄金色の派手な鎧を纏う兵士たちの上を、視線が通る。

どこにも、いない。強者の雰囲気すら、ない。

溜息を吐いた王彩の瞳から、光が失われる。

戦場に興味を無くした彼は、汗血馬に指示をだすことすらしない。

しかし、そこは汗血馬である。主人の意を汲んで、馬首を返して駆けだす。

向かう先は、なにやら兵士が多く、奥には宝石や黄金で彩られた、煌びやかな輿が見えたが、王彩の興味を誘うことも無かった。

汗血馬とて、主人が何も言わぬなら、気にも留めない。速度を緩めることなく、一直線に駆け抜けた。

兵士たちの波を越えて、飛び交う矢を物ともせず、本陣へ突っ込む。

——寸前、黄金の光が閃く。

汗血馬が嘶き、王彩は咄嗟に棍を振るった。

鈍い音がして、棍は弾かれる。拮抗などせず、圧倒的な膂力の差を見せつけられた。

腕に伝わる痺れを押し殺して、襲撃者を見る。

藍色の髪、おつかば頭、これまた派手な黄金の鎧。

手に握るは、彼女の身の丈ほどもあるうかという、金の大鎚。

王彩を睨みつけるが、穏やかな雰囲気拭いておらず、迫力に欠ける。

王彩は思う。

膂力で敵わないのは、既に承知の上。不思議な事でも、屈辱的な事でも無い。

しかし、技術では、誰にも負けないという自信がある。

前方で己を睨む襲撃者を見た。強者の雰囲気は、微かだがある。

夏侯惇や許？には及ぶべくもないが、確かに武人。それも、一騎当千の。

「武器を捨てて投降してください！　そうすれば危害は与えません！」

「残念ながら、こちらに投降の意思は無い。なに、すぐ消える。あんたが俺と戦ってくれさえすればな——！」

言うが早いか、王彩は汗血馬を飛び下り、地を駆けていた。

一步一步に音は無く、まるで燕が掠め飛ぶように、少女へ迫る。その速さは、少女がぎりぎり目で追える程度。

しかし、音も無く迫る王彩には、それ以上の何かを感じた。速さではない、もっと違う何かが。

思考を振り払い、射程圏内に王彩が入った瞬間、得物を一閃、振るわれた大鎚は地面と水平に疾る。

空気を裂いて唸る大鎚を、王彩は冷静に見て、膝の力を抜くことで体勢を低くして避けた。

いくら地面と水平とはいえ、腰ほどの高さである。それを屈むことで遣り過ごすなど、常人ではそうそう考えない。

無論、その体勢から飛び出せるだけの技術も、無い。

しかし、王彩にはある。如何なる状況でも、存分に力を振るうだけの技術が。

膝を曲げた状態から、込められた力を一気に解放する。

それはまるで一本の矢。少女の射程圏内ということは、即ち王彩の有効範囲でもある。

前方に跳んだ王彩は、棍を突き出す。加減はしない。武人に加減など、礼を失するのみ。

唸り声を上げて腹部に迫る棍。取った、そう確信した。

——刹那、側頭部に悪寒。

咄嗟に棍を引き戻し、その勢いで後ろに跳ぶ。

何事かと前を見れば、先程まで頭があつた空間を大剣が貫いていた。後一步遅れていれば、頭蓋を貫かれていただろう。

己の直感に感謝し、静かに体勢を整えて構えを取る。構えは、下段。全方位に対応する構え。

「てめえ、斗詩に手え出しといて、徒じゃ済まさねえぞ！」

「徒じゃ済まない、と。先に手を出してきたのは、そっちなんだがな。聞く耳は、持ってないんだろっな」

「ぐちゃぐちゃうるせえ！ 斗詩、行くぞ！」

「うん！」

新たに乱入した、水色の髪の少女が一喝する。

王彩に向けて、二人の少女が駆け付けた。迫るは黄金を纏った少女二人、対するは黒一色の王彩。

水色髪の少女の得物は、大剣。夏侯惇の細身の大剣を、もつと無骨にしたような、大剣。

王彩は一つ溜息を吐き、しっかりと足を踏みしめる。

「二人で来るか。それもまたよし。俺の名は王華山！ 一手、お手合わせ願おうか！」

「袁家親衛隊隊長、文醜だ！」

「袁家將軍、顔良です！」

王彩が名乗りを上げれば、二人も律儀に返す。

字では無いことに違和感を覚えたが、興味を持つほどでもない。思考を一瞬で終え、自らに迫る二つの凶器を避ける。

二人を同時に相手取れば、その分命の危険が増える。

一方を避けたとて、もう一方の一撃で命を散らすこととて珍しくない。数の暴力とは、それだけ恐ろしい。

例え二人であろうと、それが一流の実力を持っていれば、何千という兵士に囲まれるのと同義。

王彩は、武者者である。一騎当千など、彼の理想ではない。

ただ、誰よりも強くあればいいのだ。数の暴力に負けて、蹂躪されようと、誰よりも強く、誰よりも気高く。

王彩の目指す最強とは、対人限定に過ぎない。周りを何千何万という敵に囲まれても、その全てを蹴散らして進むような、将にはなれない。

しかし、それが世の武人。この時代、王彩以外に純粹な武人など、存在したのか。

——だから、誰よりも速く。誰よりも巧く。今はそれを、追い求めて。

一歩下がり、棍を軽く握る。

眼前を二つの凶器が通り過ぎた。彼女らの表情には、少なからず驚きが表れている。

王彩の動きは、特別速い訳でもない。しかし、その動きが捉えられない。

突然に消えたような、奇妙な動き。まるで、筋肉をまったく使っていないような、幽鬼の如き身ごなし。

予備動作、というものがある。

予備動作とは、動作の直前に重心を動かし、それに付随して筋肉が動く、絶対的に隠しようのないものだ。

達人ともなれば、その僅かな筋肉の動きを見て、次の動作を予測して対応する。それは、一流の達人にとって、当たり前前の技術。

達人は、筋肉の予備動作を見て、相手の行動を予測する。

相手が動き出してから反応するようでは、確実に負ける。そんな、極限の速さと集中状態に身を置くのが、達人同士の手合わせ。

相手に先んじるには、筋肉の予備動作を見て行動を予測する。なら、それが無くなれば、どうなるのか。

答えは簡単、一方的な勝利だ。

どれだけ素晴らしい肉体と動体視力を持っていたても、人間には限界がある。

それ以上は反応できない、という限界が。それは絶対に、越えられないものではない。

だからこそ、動きを予測するのだ。見てから動き、どんな相手にも勝てる人間など、それは最早人間ではない。人外の何かだ。

だから、先人たちはひたすらに予備動作を無くそうと試みた。だが、そんな事は不可能だと気付いた。結論が出てしまった。生物学的にも、初めからそんな事は不可能だったのだ、しかし、そこで断念するような、生温い人間が、達人になれる筈もなく。

先人たちは、技術と経験の全てを注いで、限界まで予備動作を小さくする動きを求め続けた。

試行錯誤の末に、完成した。極限まで予備動作を無くした、武術を。それは当然、王勝も学んでいた。それが伝えられるのは、無論のこと王彩。彼は、王勝の武の全てを伝授されているのだから。

二人が思った奇妙な動きは、これのせいだ。

二人も勿論、一流の使い手である。無意識に予備動作を読み取り、行動を予測している。

しかし、王彩にはそれが無かった。だから、二人は奇妙に思ったのだ。

これを極限まで速く鍛え上げれば、それはもう瞬間移動の領域である。視認の外にある、人外の動き。

そんな二人を見ていた王彩は、唐突に棍を突き出した。

それすらも、二人には反応するだけで限界。反撃など、無理である。弾丸の如き刺突を、見て反応するだけでも恐ろしいが。

そういった技術すらも通用しないのが、最強なのだと。薔薇色の髪の毛の『最強』を思い出して、溜息を吐く。

文醜には、溜息を吐く王彩が、自分たちを馬鹿にしているように見えた。

——あれだけ大口叩いという、これか？ はっ、期待した俺が馬鹿だったよ。

幻聴まで、聞こえる。

果てには、高笑いする王彩すら、文醜には見えていた。妄想の域で

ある。

しかし、頭に血が上った彼女に、そんな言葉は通用しない。雄叫びを上げ、大剣を振りかざして王彩に突進する。後ろから聞こえる同僚の静止の声は、聞こえない。

一瞬で距離を詰め、大剣を力の限り振り下ろす。

風を裂き、唸りを上げる大剣は、王彩を両断せんと頭上に迫る。

しかし、王彩の前で冷静さを欠くなど、愚か。彼は、こちらが冷静であれば、案外脆いものなのだ。

だが、文醜は選択を間違えた。間違えてしまったが故に、敗れる。

当たる、そう文醜が確信した。

——瞬間、王彩の姿が掻き消える。

「なっ!？」

「熱くなるなよ。冷静にいろと、師に教わらなかったか？」

驚愕の声を漏らす文醜に、嗜めるような声をかける王彩。

その身は文醜の横、手に握った棍は喉元の一寸手前。

何時の間に動いたのか、後ろから見ていた顔良さえ気付かない早業。文醜など、言わずもがなである。

王彩はまた一つ、溜息を吐いた。

『最強』は、この程度の実力ではなかった。激昂することなどあるのかと思うくらいに、穏やか。されど、激しい。

獣の如き速度、腕力、直感。どれをとっても、王彩の遙か上。唯一

勝るのは、技術だけ。

その技術すらも、恐るべき直感で意味を為さない。

果たして王彩に、勝ち目はあるのか。それすらも分からない。

だからこそ、『最強』。

先程の攻防で分かったが、顔良も文醜と同程度の実力。

ならば、戦う意味は無いのではないか。より強い相手と、より高き相手と。その為に、己は旅をしているのだから。

結論付け、王彩は棍を引いて文醜から離れる。

ついで、指笛。甲高い音は、戦場に響き渡る。彼方からとてつもない速度で、汗血馬が駆けてきた。

何時の間にやら王彩から離れていたのか。捕縛の恐れが無いとはいえ、自由に過ぎる。

王彩が気にしていないので、他人がどうこう言う問題でも無いが。

背に飛び乗り、二人の少女を見下ろす。

この戦場に意味は無いと、王彩は判断した。己に死を思わせる程、猛々しい武人と戦いたい。今は、その一心で旅を続ける。

「てめえ……見逃すっていうのか！ あたいは情けをかけられる程、落ちぶれちゃいねえぞ！」

「見逃す？ そんな事はしていない。もう、あんた達に興味は無いからな。見逃すなんて、御大層なもんじゃないさ」

興味が無いから、逃げる。

逃げる、というのも正しくは無い。彼女らが、逃がすのだ。

王彩は傍若無人に、無意識で相手を挑発する。文醜も、少しずつ苛立ちを募らせてゆく。

しかし、その原因を作った人間はといえば、もう文醜には関心に向けておらず、戦場の彼方を見ていた。

「それじゃあな。もつと研鑽を積んで、俺を殺せるくらい強くなれよ。そうしたら、また戦おう」

返事を待たず、王彩は駆け去った。

騎影は一瞬にして消え、舞い上がる黄塵だけが残った。残された二人は、歯ぎしりをする。特に悔しがっているのは、文醜だ。

絶対に強くなってやる、あいつを殺してやると息巻き、本陣に帰っていった。

王彩がなんと言おうと、見逃してもらったことに変わりはない。顔良は、王彩が駆けた方へ一度頭を下げ、同僚を追いかけるのであった。

第十六話（後書き）

果てしなく頭いてえ。

入院中に風邪を引くとはこれ如何に。

ハッ、まさかこれが噂の院内感染！？

第十七話

あの戦場より離れて、早数日が経った。

日々の移動が、全て汗血馬任せである王彩に、今自分が何処に居るかなど、分かる筈も無い。

汗血馬とて、幾ら賢いと言えども、やはり馬である。この大陸の地理が分かる訳でも無し、足の向くままに、急ぐこともせず進み続ける。

背に乗せた主は、日がな一日空を仰ぎ、手に棍を弄んでいる。なんの意味も無いことを、よく退屈せずに続けられるものだ。汗血馬が人であれば、溜息を吐いて呆れたことだろう。

一騎の騎馬が悠然と進むのは、幽州である。

つい先日、遼西郡に入ったところだ。勿論、王彩はそんな事は知らない。

幽州といえば、漢民族と異民族が雑居する地域であるが、遼西は幽州十一群の中でも特にその色が濃く、それこそ部族の坩堝となっている。

この土地を支配するのは、遼西郡の郡令であり、匈奴に名を轟かせる公孫？だ。

降伏させた烏桓族から、騎射の出来る兵士を選びすぐって白馬に乗せた、白馬義従でもって近隣諸国に知られる傑物である。

自身も白馬に乗り、陣頭指揮に優れたので、異民族には白馬長史として恐れられている。

匈奴も勇猛で知られるが、文化的に後進部族なので、漢民族からは蔑視を受けている。

無論、公孫？も討伐が目的であり、講和や和睦は望んでいない。

ただ、その配下に優れた人物が居ないのが難点であり、勢力では新進気鋭の曹操軍や、名家の頂点たる袁家には及ばない。

だが、公孫家は土地でも有数の豪族であり、土着の勢力は侮れるものではない。

王彩は先日冀州を抜けたが、数日遅ければ大きな戦に巻き込まれていただろう。

王彩が乱入したのは、黄巾党と袁紹軍の戦いであり、袁紹軍が散々に黄巾軍を蹴散らした。

黄巾党は勢力こそ大きく、数百万の軍勢で知られるが、その多くは盗賊や山賊に過ぎず、まともに戦闘訓練も受けたことのない者ばかりだ。

弱者から奪うことしかしてこなかった彼らは、強者に遭うと恐慌を起こして逃げ去ってしまう。

その為か、どれだけ人数が多くとも、蹴散らされて敗走することも珍しくない。

黄巾党の首領は、張角という人間で、それが男か女かも知れていない。

その張角が、冀州に逃げ込んだとの噂が、各地の群雄に届いた。無論、ただの噂でしかない。

しかし、群雄たちは軍を動かした。どの勢力も、優れた諜報部隊を抱えているものだ。その情報から、真実だと判断したらしい。

果たして張角は、冀州に逃げ込んでおり、城に籠っていた。

群雄は共闘して攻め落とし、黄巾軍を散々に叩き潰した。しかし、張角は既に城におらず、何処かへ逃げていた後だった。

王彩は知る由も無いが、後数日遅れていれば、各地の武人と戦う機会があつたのだ。

だが、それも叶わず王彩は幽州に入ってしまった。間が悪いにも程があるだろう。

彼はそんな事も知らず、今日も悠々と大地に行く。

前も見ず、後も見ず、左も右も、ましてや下も見ずに、ただ上だけを向いて。上に行く、ただ頂点を目指して。

愛馬の背で決意を固め、目を閉じて眠りに落ちていく。

暇さえあれば眠る、墮落的な日々である。しかし、退屈とは王彩にもどうしようも無いことであり、眠る以外に方策は無かった。

だが、その眠りは直ぐに邪魔されることになった。

汗血馬が嘶き、身体を大きく揺らす。何かと身を起こした王彩の耳に、大地を轟かす喚声と野卑な雄叫びが届いた。

汗血馬の背に立ち、前方を望めば、柵に囲まれた村を襲う一軍の姿。

はつきりと確認せぬままに、小さく舌打ちを漏らして駆けだす。

汗血馬の健脚は、風すらも置いて地を走る。猛然と黄塵を巻き上げ、村へと驀進する。

近づくにつれて、村を襲っていた軍の姿がはつきと見えるようになった。

漢民族とは違う奇妙な衣服に身を包み、手に持つのは鉞のような刀。柳葉刀を更に無骨に、荒々しくしたような刀だ。

王彩は奇妙に思う。長柄を持っている人間がいない。

漢民族とは違う衣服、つまり異民族である。大方、匈奴であろうと王彩は推測したが、匈奴とは騎馬民族である。騎兵が主力とするの

は、基本的に長柄武器だ。

よく見ると、弓兵もいないように見える。これはおかしいと、不審に思った。

しかし、今はそう細かい事を思考している暇は無い。

こうしている間にも、匈奴の軍勢は村に攻め込んでいる。もう、幾人が死んだだろう。

弄んでいた棍をしっかりと握り、前傾姿勢となる。風圧を最小限に抑えて、汗血馬は更に速度を速める。

肉体を持つ身で音の壁は越えられないが、それに迫るほどの化物染みた速度である。

一瞬で村に辿りついた王彩は、近くにいた男を一人、棍を振るって命を奪う。

声も出さずに絶命した男を置き捨て、更に村へと踏み込んだ。

道端に、屍が倒れている。

若者だ。手に刀を持っていることから、村を守ろうとした勇氣ある者だろう。一瞬目を閉じ、若者の冥福を祈る。

王彩らしからぬ行動ではあるが、それを気にしている暇は無かった。

村の入り口に人がおらず、屍も少ない。

となれば、考えられる可能性は一つ、籠城だ。この村で一番大きな家に、村人全員が立て籠っているに違いない。

村を捨てて逃げた、とも一瞬考えたが、それでは屍が倒れていることがおかしい。仮に、村を護るために残ったのであれば、もっと多くなくては変だ。

故に、籠城。王彩は、汗血馬を駆った。

家屋の間を駆け抜ける王彩の眼に、道々に転がった屍が映った。

先に見た若者と同じ服装に、刀。それを見て王彩は確信する。成程、自警団だったか。

自警団は、村で独自に結成している団体で、有志の若者で組織されている。訓練こそ仕事の合間だが、自警団があるのと無いのでは随分と差がある。

この大陸のほぼ全ての村に該当するが、防衛意識が低い。

賊に襲われれば、逃げるか死ぬかの二択しか無く、抗う術も持たず、持とうとしない。

確かに、賊は脅威だ。弱者から奪い殺す外道。

しかし、どうにも出来ない存在ではない。故に組織されたのが、自警団である。

自分たちの村は、自分たちで守る。その意識から生まれた。

だが、発想が村人のものによるものは少ない。そのほとんどは、外部の人間の指図が着想である。

停滞した思考に、風を吹き込むのは若者と外来人だ。

年を重ねると、考えは固まって斬新な思いつきはそう簡単には出ない。仕方のない事はある。

だからこそ、今まで賊に襲われても泣き寝入りしか出来なかったのだ。

抗うなど、考えもしなかったが故に。

この村は、王彩が先に見たように周囲に柵が張り巡らされている。

無論、自警団があつてこそだ。それ程の効果は望めないが、足止め程度にはなるだろう。

自警団の存在があれば、小規模の賊なら撃退できる。

が、精強なる騎馬民族には通用しなかったらしい。

風すらも置き去りに、汗血馬は駆け抜ける。

村の中央へ、一息に迫った。王彩は視界に、周りの民家とは一線を画した大きな屋敷を囲む、奇妙な衣服に身を包んだ男たちを認めた。やはり、弓を持った人間はいない。無骨な刀を手に、雄叫びを上げている。

汗血馬を疾らせる。

その速きこと、風の如く。瞬く間に男たちへ迫った汗血馬に、王彩は速度を緩めさせた。

大きく嘶き、威嚇するように棹立ちする汗血馬に、男たちは驚愕と共に振り向いた。

いつの間に、近づいたのか。ただ、その驚きで男たちの面は染められていた。

にやりと口を歪め、王彩は馬上で棍を振り回す。

それは笑みのようで、笑みでなく。面に上るは、略奪者への怒り。頭上で振り回された棍が、強風を巻き起こす。ついで、口を開いて大喝一声。気合漲る王彩の威に、さしもの烏桓族も恐れをなす。

剛胆強勇で知られた烏桓族と言えど、圧倒的な存在感を放つ、威風凛々たる王彩の前では、腰が引けていた。

しかし、怯えたりとも五胡の民。目の力は強く、面は引き締まっている。

王彩はそれを認めると、少しだけ息を吐いた。

——それは、殺戮の合図。

棍を一閃。宙を薄緑の閃光が翔ける。

誰の目にも捉えられない、神速の一撃が、側に居た男の頭蓋を砕く。鮮血が舞い、余りの衝撃に男は眼球を零して息絶えた。

がくがくと痙攣する、地に倒れた男を見る彼らの目に、ほんの僅か

に恐怖が宿った。

豪胆なる自分たちが、何故。

有り得ないと切り捨て、男たちは刀を構えて王彩を見据える。それは、恐怖からの逃避。

愚かなる選択。恐慌に次ぐ、暴走。

恐怖とは、逃げるものではない。受け入れ、許容するものだ。

恐怖を知り、それを受容した者こそ、真の強者。男たちは、選択を間違えた。

獣の如き雄叫びを上げて、一人の男が王彩へ切りかかった。

確かなる勇氣、されど蛮勇。王彩へ単独で挑みかかるなど、愚か。未だ最強の高みへ辿りついてないと言えども、彼は間違いなく最高峰の武人。

勇猛なる烏桓族だろうとも、武においては王彩に敵うべくもない。故に、その先にあるのは、死。

大上段へ振りかぶった刀を、振り下ろそうとした、その瞬間。

上げた両腕の間から、顔面へ根が突き刺さった。疾風の如き刺突は、鼻骨を砕いて顔を貫く。その中心は陥没していた。

断末魔の叫びも残さず絶命した男を見て、彼らは猛烈な恐怖に襲われた。

「ヒッ——」

「何故、怯える？ 貴様らがやってきた事と、同じことだろう？」

恐怖の悲鳴を微かに漏らした男たちに、王彩は冷酷な言葉を浴びせ

る。

命は等価値。この時代の価値観では、まず有り得ない言葉だ。しかし、王彩は忠実にこの言葉を守っている。

それが、王勝の教えであるから。命を奪えば、命で償う。王彩の思想は、どこまでも現実的だった。

「死にたくなければ、抗え。僅かながらも、生き永らえるかもしれんぞ」

無慈悲な言葉と共に、王彩は馬上より飛び下りた。

馬上で戦う術も一通りは学んでいるものの、彼の本領は地上での対人戦闘である。どこでも力を発揮できると言えど、全力が振るえるのは、地に足がついた状態のみだ。

見渡せば、群れる男たちの多いこと。

その数たるや、百を数える。王彩は呆れ、同時に更なる怒りを燃やした。

数の暴力とは、往々にして強者をも飲み込む。

それが、力を持たぬ民百姓なのだ。抗う事など、出来る訳もない。

まず、手近に居た男の胸を、一突き。

吹き飛んだ男を放り捨て、流れるように棍を振るい、その左右に居た男の側頭部を払う。

首の辺りから嫌な音を響かせて、男たちが横に半回転して倒れた。臂力に恵まれなかったと言えど、一般人のそれよりは勝る。一人一人を吹き飛ばす程度、何の問題でも無かった。

三人を一息で屠り、王彩は駆けつけた。

少人数を相手にしても、効率が悪いだけだ。ならば、もつと数の多い所へ。

そう考えての、移動である。移動の途中にも、目に付いた男の命を奪って走る。ここまでで、既に八人が殺されていた。

男たちの中にも、逃走の意思が見えた。しかし、そんなことは出来ない。出来ないと分かっていた。

汗血馬の神懸かった速度は、人の足など比べるべくもない。逃げ切れる訳が、無いのだ。

王彩は十人以上が纏まっている所へ、俊足で以て辿り着いた。その速さたるや、正しく風の如く。

余りの速さに、男たちも目を見張る。だが、驚いている暇は無かった。

空を裂く一撃に、一人の男が屠られる。

男たちも、抗わなければ殺されると、刀を構えた。構える間に、また一人。目にも止まらぬ早業に、男たちは冷や汗を流す。

男たちの構えに、王彩はじろりと一瞥をくれて、躊躇することなく、その棍を振るった。

王彩にとって、男たちが抗おうと、彼らが羽虫の如き存在であるからして、さしたる感情も持ちえない。

抗え、とは彼の言葉。しかし、本当の意味での抵抗など、初めから期待していなかった。

また一人、王彩の一閃で命を落とす。

恐れていては、駄目だ。蛮勇でも何でもいい。ただ、今は動かなければ――。

男たちの思考に恐怖が染み込み、それは本能的な逃避への欲を動かす。死の恐怖から逃れようとする本能は、間違ったものではない。しかし、逃げられない。ならば、どうするか。戦う、戦って倒すの

だ。

男たちは、一斉に雄叫びを上げて刀を振りかぶった。その速さは、死を覚悟した者の馬鹿力と言うべきか、肉体の枷が外れた人間の力は、侮ることができない。

王彩も、油断せずに刀身を見据え、両腕を振るう。その腕がぶれ、翡翠の閃光は、宙を疾った。

前方にいた男の腹部を、一突き。引き戻す勢いで、背後から迫っていた男の腹部にも、一撃。

それを左に強く引き、跳ね上げた棍を左右の二人に同時に当てる。流れるような早業で、纏めて四人を屠った。

前後左右を一掃すれば、後は冷静に残った男を片づける。四人を瞬時に殺した。

この間、僅かに二秒。

恐ろしいまでの、速さ。正しく、神業と呼ぶべきもの。

周りの男たちが、恐慌を起こした。

王彩が人の多い場所を目指したのは、男たちにとって予想外の出来事だった。人が多いとは即ち、身分が高い人間を護っているということ。

王彩は、知らぬ間に頭を殺していたらしい。司令塔を失った軍隊は、敗走するしかない。

男たちは、散り散りになって逃げ去った。それを追う意思など、王彩には無い。

何故なら、男たちが逃げていった方向に、一軍の姿が見えたからだ。翻る旗は、『公孫』の二文字。成程、公孫？の軍らしい。

王彩も、僅かながらに知っていた。ならば、任せても問題は無いだろう。そう判断して、彼は屋敷へ向かった。

少し扉を押してみるが、内側から抑えているのか、開かない。
王彩は素直に開ける事を諦め、右足を振り抜いた。蹴り開けること
に、何の躊躇も無かった。

一気に両開きになった扉の向こうで、微かに悲鳴が聞こえた。もし
やしたら、手で抑えていたのだろう。
少し胸中で詫び、中に踏み込む。

怯えを目に湛え、恐怖の面持ちで王彩を見る老若男女。
それを苦笑で見て、王彩は溜息を吐く。

——前にも同じことがあったと、そう心中に呟くのであった。

第十七話（後書き）

どうも、今話だけで五回データが飛んだ不運な作者です。

不運と言えど、その内二回は己の責。あれが無ければ、もっと早くに投稿出来たのに……。

駄目な作者で申し訳ありません。自分でも、このうっかりが治せないで、どうにもならないというか、なんというか。

最後に一言。

誰か私に、時間をください——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5695p/>

三国放浪記

2011年4月12日11時01分発行